令和４年靖國神社の絵馬

会報 特攻

令和４年２月

第１３９号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

太田賢照大和尚をお偲びして・・・・・・・・・・・・・・会員　水町博勝　2
各地慰霊祭参加報告
長崎県特攻勇士之像奉納除幕式・・・・・・・・・・・・理事　鮒田英一　3
埼玉県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・・・評議員　秋山政隆　7
明野忠魂塔慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　9
第四十八回若潮の塔慰霊祭・・・・・・・・・・・・・理事　福江広明　10
会員等投稿
多田野語録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・会員　多田野弘　13
築城基地開設五十年史より（其の七）・・・・・・・・会員　水町博勝　15
（其の八）・・・・・・・・会員　水町博勝　21
（其の九）・・・・・・・・会員　水町博勝　26
小豆島にて『蛟龍』を偲ぶ・・・・・・・・・・・・評議員　高松真紀　32
第四十五振武隊長藤井中尉報道記事・・・・・・・・会員　大槻健二　36
顕彰譜（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
連載　山ある記17・・・・・・・・・・・・・・・会員　池田康博　44
芸欄　歌俳柳の広場
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・45
事務局からの報告等
令和３年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告・・・・46
第43回特攻隊全戦没者慰霊祭の斎行について・・・・・・・・46
会報記事の訂正・・・・・・・・・・・・・・・・・46
寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・48

挿絵提供　空自ＯＢ　宇山氏

太田賢照大和尚をお偲びして

会員　水町　博勝

令和三年十一月八日に世田谷山観音寺太田賢照大和尚が遷化されました。

特攻勇士を顕現された特攻平和観音像・陸海軍二体の像を護国寺から遷座され、尊父睦賢和尚は特攻観音堂奉安の堂工事半ばで遷化された。意志を継がれた賢照大和尚は、落慶法要を昭和三十一年五月十八日に営まれて以来、十八日を月例法要日に定め、その後境内に特攻隊戦没者の慰霊顕彰の像・石碑等を整備された。

吉田茂元総理謹書の「世界平和の礎」
太田賢照大和尚の要望により揮毫

その内容は大和尚様確認のうえ会報１２８号「昭和天皇陛下・元皇族方の特別攻撃隊戦没者への思いを世田谷山観音寺に見る」記事を掲載しております。

陸海軍特攻戦没者の霊璽簿を夫々の像の体内に納めた特攻平和観音像を奉り、供養し、世界平和を願う場所、国に替わって、陸海軍全特攻隊戦没者慰霊の本山・世田谷山観音寺を整備された大和尚のご功績は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰に多大なご貢献をされました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合唱。

そしてご子息の兼照和尚・恵淳和尚におかれましては後を継がれ、私達が参拝できることに感謝を申し上げます。

２０１９年９月２３日第６８回年次法要
手前の黒い法衣の方が太田賢照大和尚

長崎縣國神社奉納「特攻勇士之像」除幕式

理事　鮒田　英一

令和３年秋、長崎縣護國神社（村田仁（しのぶ）宮司）に当顕彰会から全国で21体目の「特攻勇士之像」が奉納され、10月22日（金）に入魂祭が斎行、同月26日（火）秋の例大祭日に合わせて除幕式が執り行われました。

長崎縣護國神社の歴史ですが、明治２年、梅ヶ崎招魂社が長崎市梅ヶ崎の地に戊申戦争で戦死した43柱の英霊を奉斎し創建され、明治７年、佐古招魂社が長崎市佐古の地に台湾の役の戦没者５３６柱を奉斎し創建され、昭和17年、両社が併され長崎縣護國神社と改称され、護國神社の指定を受けるに至りました。

昭和19年10月、現在の城山の地に本殿以下竣功し遷座祭を斎行するも、翌昭和20年８月９日、原爆により不幸にも本殿以下悉く焼失し灰となり、仮殿を営み祭祀が続けられ、昭和38年10月に再建が成り、現在のたたずまいとなっています。

除幕式当日は好天に恵まれ、式典には約１００名が参列。国家斉唱後、反田邦彦・特攻隊戦没者慰霊碑建立実行委員会委員長から、建立の経緯や趣旨の説明が行われ、中村法道・長崎県知事、古賀友一郎・参議院議員、坂本智徳・長崎県議会議長、三好徳明・元長崎県議会議長、反田邦彦・実行委員長及び藤田幸生・当顕彰会理事長により除幕の綱が引かれました。

秋の陽射しを浴びた特攻勇士之像の前で、「海ゆかば」が演奏され、来賓として中村県知事、古賀参議院議員に続き、藤田理事長が挨拶を申し上げました。その後、詩吟奉納、剣舞披露、「軍艦マーチ」演奏と続き、最後に参列者総員による弥栄三唱が行われました。

除幕式では、長崎大学の学生有志が、特攻勇士の像建立の趣旨に賛同し、式典の支援に当たってくださいました。特攻隊員とほぼ同年代の若い世代の参加は、戦争及び特攻の歴史を継承していくうえで極めて貴重であることから、以下、反田委員長のご挨拶とともに学生からの所感文を掲載させていただきます。

ご尽力いただきました長崎縣護國神社と特攻隊戦没者慰霊碑建立実行委員会の皆さまに心より感謝申し上げます。

反田邦彦　特攻隊慰霊碑建立実行委員会実行委員長挨拶

実行委員会を代表し一言ご挨拶申し上げます。

慰霊碑建立をご快諾頂きました、護国神社　村田宮司様、関係諸団体の役員の方、並びにご協賛賜りました皆様方へ篤く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

コロナ禍が収束しない中にも、長崎県知事、中村法道様はじめ、多くの著名な皆様のご来臨を賜り有難うございます。

念願の特攻隊慰霊碑を建立出来ました事を、英霊の皆様に謹んでご報告申しあげます。

護国神社ご社殿の直ぐ前と云う大変良い所に建立させて頂きました。

この慰霊碑の奥には、昭和天皇・香潤皇后の行幸啓記念碑がございます。あたかも、両陛下をお守りしているかの様な佇まいで、ご英霊の御心にも深く適うものと思っております。

「特攻」とは、我が国の存亡の危機に際して、自らのお命を進んで国の護りに投じて頂いた事です。

今日、我が国が独立を保ち、平和と繁栄を享受しております。その礎には世界

に類を見ない壮絶なご偉業がありますことは、明らかな厳然たる事実です。深く感謝申し上げます。

今から丁度、八十年前の昭和十六年、我が国が「死中に活を求めて」先の大戦に突入した際、この国家の存亡をかけた戦いを「大東亜戦争」と呼称することが、閣議決定されました。

この特攻隊慰霊碑の碑文冒頭に「大東亜戦争」と記しております事は、何よりご英霊の御心に沿っていると一心に念じての事と、ご理解を賜りますよう、お願い致します。

私どもは、この特攻隊慰霊碑を通して、国家・国民の安寧と家族や愛する人々の幸せを念じて、生還し得ない戦いに赴かれたご英霊のご真情を後世に伝えてまいります。そして、我が国の誇り高い歴史を胸に刻み、世界の恒久平和の為に日本国家・国民として貢献してまいります事が、「後に続くものを信ずる」と云うご英霊からの負託に応える事になると信じ、ここにお誓い申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

本日は、誠に有り難うございます。

令和三年十月二十六日

特攻隊慰霊碑建立実行委員長　反田邦彦

参加学生所感文

長崎大学４年　堀井亮佑

この度は長崎県護国神社での特攻隊慰霊碑除幕式、おめでとうございます。式典に関わる貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。感想を以下に記します。

今回の特攻隊慰霊碑建立について、参列されていたご遺族の方々、当時を知る方々、自衛隊関係者、神社関係者の方々など、本当に多く方々が関わっているのを目にしたこと、反田実行委員長や藤田理事長がお話されていた慰霊碑が建立されるまでの経緯やその由来についてお話を聴いたことで、この慰霊碑建立に多くの御志と御尽力があって、今特攻の歴史が顕彰されていることを肌で実感しました。

そこから更に、反田実行委員長を始め、これだけ多くの方がなぜそこまでして、歴史の顕彰に尽力されたのか、ということについて改めて考えました。

今回の式典に参加させて頂いたり、特攻の歴史に触れたりした時、大東亜戦争を始めこれまでの歴史において国の為に命を捧げた方々への尊敬と感謝の気持ちが起こります。しかし同時に、自分の心の中を見つめると、心からの慰霊の気持ちが私の中にあるのか分らないところもありました。「そもそも大東亜戦争はおろか、戦中、戦後を通して生きた方々の御苦労を知らない私たちの世代が、特攻で散華された方々の偉大さや犠牲の尊さ、それを感じるからこそ来る慰霊の気持ちを、実感をもって理解することなどできないのではないか」。そう思ってしまうことも事実としてあったからです。

では、当時を知らない私がどうすれば特攻隊の方々のことを自分に引きつけて考えることができるのか、正直なところはっきりとした答えは出ていないのですが、今の私なりに考えたことを以下に述べたいと思います。

今回参加した私たち大学生は、当時特攻隊に志願した方々と近い世代です。私自身、大学４年生で、来年社会人になる年代です。今、私が人生について考える時、将来、社会に出て何十年も生きて好きなことをして人生を謳歌したい、家族、友人、好きな人と月日を過ごしたい、学問に励んで自分の専攻する分野で日本の為に活躍したいなどといった、将来の夢を当たり前の様に描いてます。同時に、社会や国の状況などがある程度理解でき、日本の行く末について頭を使える様になっていると思います。そして、この「社会

のことを考えつつも、自分の将来を描く強い気持ち」が起ることは、どの時代の若い世代ともあまり変わらないと考えています。

特攻で散華された方々のご経歴やご遺書、日記等を注意して拝読すれば、特攻隊としての勇ましさだけではなく、楽しみがあったり、友達や恋人がいたり、家族のことを思ったりと、普通に生きていた人達だとわかります。そして何より、今の私たち大学生の世代と同じ様に将来があった人々だったことに気付きます。恐らくその方々も、「当時の日本の現状を理解しつつも、その方々それぞれが、自分の将来について描く気持ち」はあったのではないかと思います。

そのように考えた時、特攻隊の方々が成したこととは「国の危機に臨んだ時に自分の将来に描いていたものすべてを捨て、特攻に向かったこと」だと思われました。勿論時代状況や置かれている環境は全く違うとは思いますが、今の私が将来に描いているものを捨てることは想像すらできませんし、あまりにも大きな決断と覚悟だと感じます。また、特攻隊の方々のご遺書には親や兄弟を始め、後に残る人達を思う言葉も多く見られるように思います。自分が特攻に征った後、残る者達に自分の人生を譲る優しさの様なものも感じました。

それらに気がついた時、特攻隊の方々は後の日本を思う優しさとあまりにも大きな覚悟を持たれていたことが、私たちが全く及ばないところだと心から思いました。そして、うまくは言えないのですが、大東亜戦争の歴史を偲び、慰霊をさせて頂くとき、その「偉大さ」に心を留めることは勿論、そのような方々が“日本人の先輩にいた”という事実を確認すること、それが日本人として生きる上でとても大切なことで、それを次の世代にも伝えていくべきことなのだと感じました。

長くなった上に、とても拙い文章で申し訳ありません。以上が、私が今回の除幕式の参加を機会に、「特攻」の歴史について考えたことです。改めて大東亜戦争と、その中でも「特攻」の歴史を考えることの大切さと難しさを感じます。しかし、多くの方々が今に伝えてくださった歴史を正しく知り、日本人としての自覚を持って生きられるように努力していく所存です。ありがとうございました。

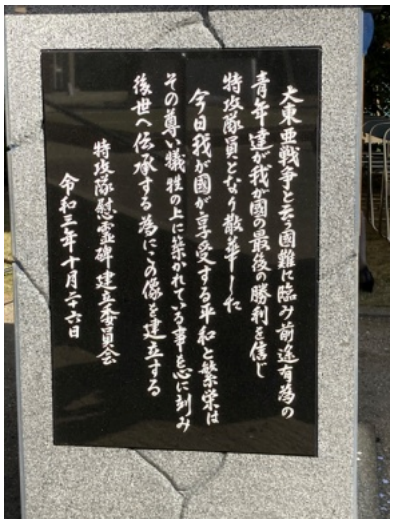
開会の挨拶をされる反田実行委員長

長崎県知事による来賓挨拶

長崎県知事らによる除幕

特攻勇士之像

特攻勇士之像の碑文



長崎縣護國神社社殿と「特攻勇士之像」

埼玉県「特攻勇士之像」慰霊祭に参列して

評議員　秋山　政隆

令和３年10月31日（日）、埼玉縣護国神社「特攻勇士之像」前にて催行されました埼玉県特攻隊慰霊祭について報告します。

当日は式典の最中に大雨が降る生憎の天候であったが、ご遺族・戦友を含め、20名が参列した。コロナ禍も幾分収束したとは言え、お互い変わらずマスクは不可欠という最中、英霊に哀悼の誠を捧げたいというお心ある方、多数ご参集賜った。当顕彰会及川昌彦評議員の司会により国家斉唱から始まり、埼玉県特攻戦没者に対しての黙祷、今年就任されたばかりの埼玉県護国神社権禰宜鳥崎氏の神事で執り行われた。追悼文は柳澤壽昭埼玉偕行会会長、第29代東北方面隊幕僚長により奏上され参列者全員による玉串奉奠で式典が締めくくられた。

特攻勇士之像前における式典

会場を護国神社社務所２階へと移して直会となった。恒例の埼玉県特攻勇士之像奉賛会関根会長による講話は、参列者同士の懇談中心の形がとられたため、今年については、談話文のみを賜った。内容は次の通りである。

関根会長談話文

世の中で最も価値の高いものは、金や財産や地位や名誉ではなく、人の命、人の生です。

人は誰でも最高の価値を有する命をもっていますが、その命には決定的な弱点が二つあります。

その一つ命は自分で造ったものではないということです。命は親から戴いたものであり、授かったものです。人から預かったものに過ぎないということもでき

ます。自分で造ったものであれば自分の都合でそれを捨てることも許されるでしょうが、預かっているものならば、勝手に捨てることは許されません。人には元々自殺する権利はないのです。命を捨てることが許されるのは、他者の命が危険に晒されており、それを救う上で他に方法がなく、やむを得ない場合に限られます。他者の命を救うために自分の命を捨てることは最高の価値を有するものを救う行為ですから、尊い行為であり、尊敬に値する行為です。

関根会長ご挨拶

命は親から戴いたものであるといっても親がそれを自ら創作したものではありません。人の命は、１３８億年前のビッグ・バン以来長い時間をかけて形作られたものです。幾多の試行錯誤と経験を経て今の命があるのです。過去の人類の経験に基づいて伝統が作られています。過去の人々の意志や伝統は尊重されるべきであり、軽々しく伝統を捨てるようなことはすべきではありません。

人の命の二つめの弱点は、人は一人では生きて行けないといくことです。生まれたばかりの子供には、母親とその乳がなくてはなりません。授乳拒否の恐れが、倫理・道徳の起源です。人が成長し生きていくためには、家族、友人、地域といった共同体の支援が必要です。人の生を助けてくれるこれらの共同体に対しては、人は忠誠を尽くさなければなりません。忠誠を尽くすということは裏切らないと行くことです。共同体から要請がある場合には、それに誠実に答えなければなりません。国家は人の生を助けてくれる数々の共同体の中で、人の生に対して最終的な責任を負う共同体です。最高の共同体である国家に忠誠を尽くして亡くなった特攻隊の英霊に対しては最高の尊敬がはらわれなければなりません。

続いて、特攻隊戦没者慰霊顕彰会岩﨑茂副理事長による献杯で始まった直会は、埼玉偕行会、埼玉県遺族会、大宮遺族会、所沢遺族会、入間航友会、甲飛14期、当顕彰会からの参加者で和気あいあいとした雰囲気で初めて参加された方も交え懇親も深められた。

また、直会終了後、柳澤壽昭埼玉偕行会会長以下関係者と当顕彰会有志による来年以降の運営について意見交換した。

埼玉県特攻勇士之像

令和３年度明野忠魂塔慰霊祭に参列して

編集長　金子　敬志

令和３年11月７日（日）陸上自衛隊航空学校に於いて「令和３年度明野忠魂塔慰霊祭」が執り行われました。

この慰霊祭に特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して参列させて頂いたので、概要と所見を述べます。

一　慰霊祭の概要

当日は最寄りの近鉄明野駅と駐屯地間に航空学校の送迎バスが運行されおり、それを利用させて頂きました。

明野忠魂塔

夜来の雨は止んでいたが、天候が不安定なため慰霊祭は体育館「明桜館」で行なわれました

「明桜館」内に設けられた祭壇

慰霊祭の時程は十一時～十二時の間で、開式の辞に始まり、明野駐屯地隊員による儀じょうに続き追悼の辞を航空学校長安井寛陸将補と明野忠魂塔会長梼原久生氏のお二方が捧げられました。

その後、遺族、来賓、そして参列者全員による献花、追悼電報披露、儀じょう、弔銃を捧げた後、参列者全員による礼拝、閉式の辞をもって今年の追悼式は滞りなく終了しました。

二　所見

明野忠魂塔については「忠魂塔顕彰之誌」によれば

「昭和17年12月空の軍神加藤健夫少将をはじめ明野陸軍飛行学校関係の戦没及び殉職者の慰霊・顕彰を目的として建立されたが昭和35年に小畑英良大将以下の戦没者、昭和50年に陸軍戦闘隊に奉職したすべての殉国に英霊を合祀したので忠魂録に記載されていない氏名不詳の英霊多数も祭られている。更に昭和46年、陸上自衛隊航空学校関係の殉職者の英霊を合祀して今日に至っている。」

となっており、慰霊対象は「駐屯地殉職者及び明野陸軍飛行学校関係戦没者」です。

そのため、追悼式は陸上自衛隊明野航空学校長が執行者となっており、航空学校が全面的支援の下、実施されていますので、今後とも継続されると考えます。

今年は新型コロナの影響により規模を縮小して斎行されましたが、来年は元の規模で斎行されることを願います。

第四十八回若潮の塔慰霊祭に参列して

理事　福江　広明

令和三年十一月二十三日（火）、「第四十八回若潮の塔慰霊祭」（以下「慰霊祭」）が、香川県小豆郡（しょうずぐん）土庄町（とのしょうちょう）にある富丘八幡神社境内に建立されている「若潮の塔」前において催行された。参列者（主催・若潮の塔奉賛会会員、ご遺族関係者、来賓等）は昨年と同規模の約三十名であった。

この慰霊祭に、当慰霊顕彰会の高松真希評議員と共に参列させていただいたことから、慰霊祭前の行動、同祭の概要及び所見を取りまとめた。

一　慰霊祭前の顕彰行動等

慰霊祭の前日、曇天の中、東京駅から新幹線に乗車し岡山駅にて下車。同駅においてＪＲの快速マリンライナーに乗り継ぎ四国入り。高松駅着後は、高松港まで徒歩。同港から小豆島・土庄港までは高速艇で三十五分の船旅であった。

土庄港ターミナルで高松評議員と合流した後、宿泊先が管理する自転車を借用して、富丘八幡神社に向かう。途中、特攻にゆかりのある史跡等を見学。

高松港からの高速艇

①「世界一狭い土渕（どぶち）海峡」

同海峡は、延長二・五キロメートル、最大幅四百メートル、最小幅九・九三メートルで小型漁船等の航行に使用されている。一九九七年にギネスに掲載。今回の慰霊対象である陸軍船舶特別候補生隊（若潮部隊）の交通・訓練の経路でもあった。

②「若潮部隊の教育施設・兵舎の跡地」

約四千名が猛訓練に血と汗を流した第二の故郷等々と綴られた顕彰之記が、当時正門であった傍らに建立。正門を入るとすぐの所には唯一当時を偲ぶシンパク（真柏）の木がある。今年八月ＮＨＫのドキュメンタリー番組「マルレ“特攻艇”隊員たちの戦争」の中で紹介された。

土淵海峡

跡地に立つシンパクの木

その後、小雨交じりの中、町の指定文化財である富丘八幡神社の桟敷（二百数十年にわたり住民が祭典行事を楽しんできた伝統の地であり、家族団欒、親戚等との交歓の場）を見渡しながら、三木孝男宮司の表敬に向かう。

三木宮司から慰霊祭の準備状況、若潮部隊の関連情報を拝聴した後、日没と本降りを気にしつつ、宿泊先に戻る。

翌日、天候は回復したものの、気温は十度前後と昨日までと異なり、かなり冷え込む。慰霊祭までの時間を有効活用す

るために、小豆島在住で高松評議員と昨年来、交流のある方に早朝から私有車で島内を案内していただく。

宿泊先を八時に出発。日本三大奇景にして、瀬戸内海国立公園の景勝地である寒霞渓（かんかけい）を訪れる。渓谷全体を覆う紅葉に魅了された後、近傍にある特殊潜航艇にかかる碑に向けて車両移動。

③「特殊潜航艇基地跡之塔」

これは、小豆島内にある特殊潜航艇に纏わる碑及び碑文等のうちの一つに当たる。小豆郡内海町の古江庵内から古江湾が望める場所に建立されていた。碑には、当該基地において約二千名の隊員が十二隻の特殊潜航艇をもって日夜訓練に励んだが、大戦終戦の日に解隊された旨が刻まれていた。

特殊潜航艇基地跡之塔

穏やかな瀬戸内を眺めながら、風光明媚な小豆島にあって多くの若人が、国土防衛のために死生観をもって過酷な訓練に精励していたことに想いを馳せる。

古江湾を後にして、日本棚田百選の一つである「中山千枚田」及び樹齢千六百年以上のシンパク（日本一の巨樹）がある「宝生院」に立ち寄り、富丘八幡神社に到着。

瀬戸内海、余島を望む風景

二　慰霊祭の概要

十時から新嘗祭、氏子総代会が催されていた。その間、社務所付近に集合されていたご遺族及び関係者等の専らの話題は、先述のＮＨＫのドキュメンタリ番組の内容に関するものであった。当該番組をご覧になって慰霊祭に参列された方もおられた。

慰霊祭自体は、十一時に催行予定のため、参列者一同は瀬戸内海の余島を眺めながら、式典会場となる若潮の塔前に徒歩移動。

慰霊祭は、前日と打って変わり冬の到来を感じるほどの気象状況の下、定刻どおりに始まる。

式次第は次のとおり。

・黙祷
・修祓の儀
・降神の儀
・献饌の儀
・祝詞奏上
・玉串奉奠
・撤饌の儀
・昇神の儀

若潮の塔

進行において例年と異なることが一つ。修祓の儀に先立ち、黙祷が行われた。これまで若潮部隊の元隊員として同部隊の慰霊顕彰に貢献され、かつ当会に関連記事を寄稿していただいていた中溝二郎氏（九十五才）の死を悼むものであった。

三木宮司により同氏の丁重な紹介から、いかに同氏が生前、熱誠をもって同胞供養のために活動されていたかをうかがい知ることができた。

直会に関しては、新型コロナ感染が収束傾向にあったものの、予防に万全を期すとの配慮から昨年同様、中止となった。

なお、若潮部隊、若潮の塔、小豆島、富丘八幡神社については、当会発行の会報第一三四号七～八頁に高松評議員がその細部を記述しているのでご覧いただきたい。

三　所見

小豆島の滞在は、二十四時間に満たなかった。しかし、慰霊祭式典への参列のほか、限られた時間の中で若潮部隊をはじめ小豆島を訓練地としていた関係部隊にかかる顕彰活動を予想以上に行うことができた。先に記述した史跡等の訪問はそれぞれに感慨深かった。

これまで各地における慰霊祭等の参列するにあたって、私は戦没者に対する慰霊顕彰という行為の世代継承について特に関心を持って臨んできた。

当該慰霊祭においては、参列者の半数近くが主催の若潮の塔奉賛会の会員である。会長の丹生年一氏のリーダーシップによるところが大きいと思われる。このため、今後とも慰霊祭は整斉と催されていくであろう。

ただし、慰霊祭終了後に会長にご挨拶した際に、「戦争体験者は私（会長）だけとなりました」と話されていたことが印象に残る。

その言葉には、戦後世代の後継者育成と顕彰の場である慰霊祭の主催継続には、よりいっそうの尽力が必要だとの意味が含まれているように感じられた。今後とも若潮の塔奉賛会の会勢が維持されることを心から期待する。

一方で、テレビによるドキュメンタリ報道が、ご遺族のみならず一般の方々に対して慰霊祭等への参画を促す大きな影響力を持っていることがあらためて認識できた。

マスメディアの持つ検証力や公共力を如何に活かしていくかが、当会にとっても各地の慰霊祭等を主催する組織にとっても、これからの重要な課題ではないだろうか。

結びに、小豆島において慰霊祭参列に加えて、限られた時間内で濃密な顕彰活動を行えたのは、高松評議員の段取りの良さによる。昨年、当該慰霊祭に参列した時の経験を活かし周到な計画を立案していただいたおかげである。

また、三木宮司や地元住民の方々からの信頼を同評議員が得ていたからこそ、島内各所への移動、関連情報の入手等に協力していただけたと確信している。

多田野語録
「言葉の力」

会員　多田野　弘

言葉は、考えていることや感情を、文字や音声を通して伝えるために用いるものである。また、言葉は生き物とも言われている。誰もが、言葉によって、励まされたり救われたり、逆に傷ついたり嫌な思いをした経験を持つ。そのように言葉は大きな力を持っている。

言葉を使うとき、積極的な言葉か消極的な言葉かによって、その人自身にも少なからず影響を与えている。言葉が潜在意識に刷り込まれて、意識が変わり、行動が変化するのである。また、聞く側にとると、言葉をどう受け取るかによって、そこに含む意味や心への響き方が決まるのではないか。つまり、聞く人の人間的な深さや教養の高さによって、言葉を力として活かせるかどうかである。

言葉は、私たちが幼児の頃から音声と文字で覚え、頭中に蓄えられ記憶にとどまる。だが、生きていく上で言葉に表現できないことが限りなくある。たとえば、「悲しい」という言葉ひとつとっても、どれほど詳しく言語化しても、悲しさを伝えきることはできない。聞く人は自分の体験から、その悲しみの深さを推量するしか術はない。言葉は、感じることを表現できない不完全性を持っている。したがって、言葉の表面上の意味だけでなく、奥に隠れた意味を斟酌しなければならない。

言葉は、人の心と身体に深く関係しており、同じことでも、積極的な言葉で表現した場合と、消極的な言葉で表現した場合では、意識への影響に格段の違いがある。たとえば、「今日は気分が良くない」とか「頭が重い」などと言葉に出すと、それが事実だとしても、口にした瞬間にさらに不快な気持ちになってしまう。同時に「もっと悪くなるのではないか」とか、「どこかが悪いのではないだろうか」と、悲観的になり、益々悪い方に気持ちが向いてしまう。

これとは逆に、「今日も頑張ろう」とか「よし、やろう」といった積極的な言葉を使っていると、生命が躍動し、極めてよい状態になってくる。「今日は嬉しい」「楽しい」「有り難い」などと言った時には、何ともいえない快さを感じるものである。この感じるというのは、直ちに潜在意識に影響し、さらにそれらにつながる神経系統に表れてくる。つまり、言葉の使い方次第で、潜在意識が生活態度に表れ、行動が変容し、それが習慣となって運命を変え、人生をつくるといえる。

消極的な言葉を使えば、人は愉快ではないし、言った本人も決して愉快ではない。積極的な言葉を常に使えば、その人の潜在意識は明るく照らされてくる。そうした言葉を繰り返すことで、生きる活力が知らず知らずのうちに培われる。ゆえに、自分の使っている言葉によって、気持ちが塞がれたり、叱咤激励されたりする事実を知らねばならない。

積極か消極かを示す例がある。コップに半分の水を見て、「もう半分しかない」と思うか、「まだ半分ある」と思うかである。また、雨が降ってきた。「嫌な雨だなぁ」と天を恨む人がいるかと思うと、「いいお湿りだなぁ」と天に感謝する人がいる。どちらが幸せかは言うまでもない。私と同じ年配の人が、「１００歳になっても、先が思いやられる」という。一方、「ありがたい、まだ１００歳だ、これからが本番だ」というのは私だ。

とはいうものの、本番に残された貴重な年月を、どう生きるかである。一言でいうなら、いのち尽きるまで、自分を最大限に活かす以外にはあり得ない。まだ年に似合わぬ頑健さを保ち、精神はます

ます冴えている。人生の総仕上げとして、一体人間はどこまで自分を高めることができるだろうか。どこまで精神的に成長できるかが、私に残された仕事だと考えている。言葉には力がある。心をよい言葉で満たして自分を活かし、同時に今までの経験や思いを言葉にして周囲の力となりたい。

ー私が力を得た積極的な言葉ー

・「憂きことの、なおこの上に積もれかし、限りある身の力試さん」（熊沢蕃山）

・「いかなる過酷な環境に置かれても、精神の自由は奪われない」（ビクター・E・フランクル）

・「心を主とする勿れ、心の主となれ、克己こそが最高の快楽」（サミエル・スマイル）

・「生きながら、死にて死に果てて、思いのままにする業ぞよき」（日本のことわざ）

多田野語録

「天に星　地に花　人に愛」

会員　多田野　弘

表題を見て頭に浮かべたのは、宇宙・大自然・天・大いなるものの存在によって私たちは生かされていることである。

今月、私は百一歳を迎えた。百歳を迎えた時にも、よくぞこの年まで生きてこられたものだと思った。戦争を潜り抜け、波乱に満ちた人生を生かされてきたのである。なんという幸せだろうか、感謝して余りある。何時この世を去っても悔いないとお迎えを待っていたが、何事もないまま今日を迎えることができた。

年を重ねるごとに誰もが、過去を懐かしむことが多くなる。私もこれまでの出来事をくるめて、我が人生を振り返ってみた。それは一言でいうなら、僭越ながら、魂の目覚めによる克己の人生だったと断言できる。

３年余の戦場で死んで当然の自分が、生かされていた体験から得た死生観は、私の性格を消極から積極へ一変させた。命を投げ出して烈しい弾雨の中を、動じることなく行動できたのは魂の快感であった。戦後、誰もが敬遠するであろう元日の寒中水泳を、93歳まで49年間続けられたのも、克己の快感がそれを容易にしたといえる。

克己が喜びになる例が登山にもある。重いリュックを背負い、生命の危険さえある困難な山に挑み、汗水たらしてヘトヘトになって帰ってくる。困難だからこそ登山は楽しいのであって、苦しみが全くないなら喜びは半減する。頂上を極めたときの達成感が喜びとなり、次にはより高く険しい山を目指すようになる。登山も寒中水泳も予想できない困難に挑戦し、乗り越えた達成感が克己の喜びであり、自分を統御・支配出来た魂の快感である。

「心を主とする勿れ、心の主となれ」という名言があり、トルストイの書「人生の道」にも、「魂は、肉体に宿り、心と身体を統御・支配する」と述べられている。魂は、大自然（宇宙）の意志によって与えられた生命に含まれており、宇宙の意志を帯しているがゆえに、我が命さえも捨てさせる大きな力を持っている。戦場で逃れられない死を前にして、心で死を覚悟したものの、おいそれと弾雨に身を晒すことは容易ではなかった。日々、死の恐怖と対峙する中で、自分自身が魂の存在であるのを知った。弾雨の中を平気で行動できたことから、覚悟（心）と実行（魂）との間に、天と地の開きがあるのを知り得た。

魂は強い意志の力と共に、愛の力を併せ持っている。心で愛することができないのは、愛が科学的、合理的でなく、最も人間的な行為だからだ。愛するとは、相手に自分の一身を委ねる命がけの行為であり、いかなる報いがあっても受け容れ、許すことである。つまり、相手のた

めに命を捨てられる魂のみが、愛するという奇跡を生むのである。愛するとは、信じることであり、魂がそれを可能にしているといえる。

戦後の私の行動は意識せずして克己の一挙手一投足に始まり、人を信じ、宇宙・大自然・天・大いなるものの中での歩みだった。幸いにも次々と幸運に恵まれ、親子三人で始めた零細企業が、社員の自主的な協力を得て、一部上場の中堅企業となり、製品の半分を輸出する世界企業にまで発展することができた。しかも、１０１歳の長寿を与えられた私は、世界一の果報者かと感謝の毎日を過ごしている。

書斎における多田野氏
机上に零戦の模型が置かれている。

1　著者の軍歴

昭和14年海軍に入隊、航空機整備兵となる

昭和18年～　ラバウル、サイパン、トラック諸島、ペリリュー島、フィリピンへと転任、同地マバラカット飛行場に於いて、

昭和19年10月25日　最初の神風特別攻撃隊の出撃を見送る。その後、整備員として特攻作戦に参加、多くの特攻機を見送った。

基地員として、命懸けの特攻作戦を経て、昭和20年1月茨城県の戦闘３０６飛行隊に転任。８月、宮崎県富高で終戦を迎える。

復員後、株式会社タダノ創業者多田野益雄（父）とともに日本で最初の油圧式トラック クレーンを創りあげた。

現在はタダノ名誉顧問に在籍。戦後、民間人として、戦時中の、特攻隊員等戦没者の慰霊顕彰に尽力。

2　その他（以下の情報がネットで検索可能です）

・ＮＨＫアーカイブ「多田野弘さん証言－ＮＨＫ戦争証言アーカイブス」
・株式会社タダノのホームページ tadano .co .jp／企業／ 航海日誌
エッセイ「航海日誌」

築城基地五十年史より（其の七）
基地抗堪化の施策について

会員　水町博勝

航空基地として戦力を維持し戦う力を持ち続けるか、有事に継戦能力はあるか、平時には学べない、教訓に興味があります。築城の特攻部隊を佐伯空と日出生台の三か所に分散展開する計画、日出生台は飛行場ではありません。新たな建設です。また築城ではどうであったか、次は飛行士が兼務した特命の想い出です。

日出生台隠匿飛行場の建設

築城海軍航空隊
元海軍少尉　小川　與

私は第五分隊士兼偵察教官を拝命した。練習生分隊である第五分隊は、当時築城の本隊から小一里も離れた椎田国民学校の講堂に分宿しており、殆ど毎日防空壕堀りが日課になっていた。

昭和二十年六月十日、それはもはや夏を思わせる日だった。南国特有のじりじり照りつける日差しの下で、隊員と共に、汗と泥まみれになって作業していた私は、「司令が呼んでおります」との伝令を受けた。

汗を拭き司令室に入ると、司令山路大佐は第四分隊長浅川大尉と用談中であっ

た。徐に司令は「秘匿飛行場建設の浅川部隊甲板士官として、明朝出発してくれ」と命令を下した。行く先はヒジュウダイとのこと。聞いたこともない。さては、外地行きかと胸をときめかした。作戦の都合上、本隊もヒジュウダイと宇佐空と鹿屋空に分散することになったのである。ヒジュウダイ基地完成後、司令以下西田大尉の一隊が乗り込んで来るという段取りになっていた。

司令室を出て、早速副官部に行き地図を拡げて見る。北九州の山奥にある日出生台という場所であった。陸軍の演習地で、水に困るという情報も得られた。

外地行きの夢は破れ、皮肉にも山男の命運が待っていた。軍紀・風紀を取り締まる甲板士官も早く云えば土方の監督である。

とうとう本格的になったかと失笑するほかなかった。「実行だ、実行だ」これはいやというほど、叩き込まれた批判を許さぬ、是非もない軍隊生活の最も身近な処世哲学であった。

最初の編成はお粗末なもので、浅川大尉以下三〇〇名程度であった。さしあたって明朝出発の打ち合わせも終わり、私は下宿に帰り支度にかかった。

早朝の椎田駅頭で編成を終わり、別府を過ぎ大分で乗り換え、北由布駅下車三里の山道行軍にかかる。用具や食糧を積んで早目に本隊を出発したトラックに途中で追いつかれる。各自荷になる物をそれに積み込み、浅川大尉もそれに乗って貰い、私は隊員と共に歩くことに決めた。身長一六〇糎ちょっとの私は、次第に軍刀の重さを感じ、ついに腰に差してしまった。山に入る用心のために持って来た。この大時代的な一物を正直に言って持て余し気味であった。短剣の身軽い効果を思い出す。

サイダーはもうとっくに無くなり、水筒を持って来れば良かったと悔やまれたが、後の祭である。地図を頼りに先頭を切っていた私は、水のある場所に差し掛かるを幸い、小休止を命じた。曲がりくねった頑丈な広い道路は、いつしか頂上へ着かせてくれた。幸い一人の落後者もなく、見下せば今通って来た北由布の町が、湯布院温泉が霞んでいっぷくの墨絵を思わせる。昼食にする。靴擦れの疼きか、豆が壊れたのか痛みを感じる。腰を上げ再び行軍に移る。ここから先はなだらかな丘陵をなした遥かな草原である。その中をレンガ色の肌を見せた一筋の道が、周囲の緑と美しい対象をなして、くっきりと果てしなく丘陵のうねりに沿って続いている。広大な草原は、天然の牧場になっている。野放しの牛や馬が人間を警戒するでもなく、三々五々草を食み、あるいは佇んでいる牧歌調は平和な別天地に踏み込んだと錯覚を起こさせる。

兎に角辿り着いたのは三時に近かった。先発隊の交渉で、演習地用のトタン屋根の長い三棟を借り受けて入ることになる。附近には演習地のために出来たと思われる部落が少々あるのみであった。

主計兵は持ってきた鶏肉が腐ったと報告に来る。この暑さでは無理もない。何はともあれ、新鮮な野菜が必要であった。石炭は近く本隊より入る予定であるので、当座の燃料確保も緊急を要し、当地の有力者と思われる郵便局長宅にでかける。雑用係の比重が大きくなってきた。取り敢えず若干の薪を入手し、少々持ってきた野菜や缶詰で夕食を済ませた時は、初夏の長い日差しもくれかけていた。

清々しい高原の朝である。昼間の暑さは嘘としか思えないほどの肌寒さを感じる。

「こんなにきれいな緑を見たことがありません」感無量の面持ちで森二水が眼前に聳える由布岳を見つめている。絵の上手な彼の心の余裕を羨ましく思いながらも、私は身支度を整えて朝露のしっとり

と降りた草原を駆け下り、例の如く朝礼をやる。体操を終わり、午前中は身の回りの整理と掃除に当たらせることにして解散を宣する。然し、吾々には滑走路予定地の選定、用具の点検、人員配置計画、薪とり、演習管理人等との下相談等、作業開始前の準備が山積みしていた。

いざ作業にかかって驚いたことは、なだらかに見える丘陵には意外に凸凹の多いことだった。これを完全にならして、平なしっかりした滑走路を造ることが浅川部隊の任務である。第一日目はあっという間に過ぎ去った。好天気に恵まれて、起きては作業、起きては作業の毎日が続いた。昼食後の一時間を昼寝にあてることにする。それは自然の要求であった。ぐったり疲れている全員は、焼けるようなトタン屋根の下でも倒れるように一秒を惜しんでまどろむのだった。私も腰を降ろせば猛烈な睡魔に襲われるのを如何ともしがたい程疲労を覚えていた。

各自の特技を活かして、土堀り、トラックの上乗り、用具修理等々に分けているものの、真っ黒に焼けた全員が一つの目的に向って黙々と作業している人間像に崇高なものさえ感じるのだった。仕事が捗ると労苦をねぎらってやりたいものだ。「本日は早くすんだ。ご苦労さん。唯今より酒保がある。掛かれ」作業終了を宣すればワァーという歓声とともに猛烈なスピードで走り帰る隊員である。その後ろ姿を見守る我々は、充分とまではいえなくとも少しでも多く支給できるようにと奔走するのだった。仕事は例のごとく続いて目に見えて捗ってゆく。

隊員も六〇〇名程度増員されたせいもあった。夕食後のひととき「浅川建設部隊として、飛行場建設を引き受けて全国を廻ってもいいね」などと皆で笑うほど仕事振りも板についてきた。

七月も中旬となり、滑走路完成の日が近づき司令も進捗状況視察に見え、やがて西田大尉自ら着陸試験を行う日がやって来た。吹き流しは気になる風向きを示している。入念な着陸準備が終わった頃、上空を旋回し始め山の中腹をぬって着陸態勢に入ったが、滑走路はあと幾らもない。失敗か、事故の予感で思わず手を握る。然し、一瞬ものすごい爆音で飛び去りやり直しにかかった。

滑走路の短さに臍をかむ思いだった。今度は大胆にも反対側から着陸態勢に入る、予想もしないことである。皆固唾をのむうちにエンジンをしぼった。三点着陸、ガタンガタンとスピードを落として近づいて来る。

成功だ。「やったぞ、やったぞ」ひかれる様に皆駆け寄った。スイッチを切りゆっくり降りて来る西田大尉に驚異と感謝の目が注がれる。当然滑走路の不平が出るものと予想した、然し、最初に「どうもご苦労さん」と来たのには意外であったし、皆今までの苦労が吹き飛んでしまった。その上本隊付近の特産品水蜜などを持参されてのねぎらいにかえって戸惑わさせられるのだった。

暫く休憩の後、全員滑走路脇で見守るうちに無事離陸、本隊に向って飛び去った。

私は機影を追っていつまでも大空をみつめていた。当時私も特攻隊編成の報を受けていた。戦局の必然性の前には是非もなかった。自分の造った滑走路からあの様に二度と帰らぬ大空に飛び立たねばならぬ日もそう遠くない筈である。不覚にも言い様のない寂寥感と虚無感に厭われるのだった。生まれて二十三年間の経験も、死を前にしては何の役にも立たなかった。

かって、本隊から特攻出撃の光景は、追憶するには余りにも生々しかった。人間的苦悩の解決と厳しい現実の行動を肯定するには、二十歳そこそこの隊員には荷が重すぎるのだ。それからの逃避を僅

かに粗暴な振舞に求めている姿を見るに忍びなかった。然し、愈々自分の番が回ってきた。私はよく鈴鹿空での飛行訓練中の一くぎりを思い出した。高度一五〇〇順調な飛行中突然高度計が下がりはじめた。大地がぐんぐん大きく迫って来る。なおも高度計はぐるぐる回る、失速、墜落、もはやこれまでと観念した。自分の身近な人の顔が脳裏をかすめる。エアー・ポケットに入ったのである。長い長い時間が経過した思いだった。然し、あの状態で目標に向ってあと二、三秒我慢すれば特攻の任務は終わるのだと死に対する物理的な解決を自己流に見い出していた。「考えるまい、考えるまい」考えても始まらないことだった。死の意義などについて、人生について、思い廻らすことを、また一人になることも、卑怯にもわざと避けていたのである。「出撃の命令が出たら行けばいいのだ」私は儚い、浅はかな「実行、実行だ」のみを僅かに心の支えとして妄念を振り切る如く士官室に走り帰った。そこにはまだ人間の生活があった。そうだ、俺にもまだ後幾日かの人生が残されていると、ほっとするのだった。

飛行場も完成し再び司令を迎えることになった。

ラジオは先刻より重大放送の予告を繰り返している。昼になり司令以下例の如く所定の位置で昼食にかかる。重大な放送の時が来た。雑音のため聞き取りにくい。私は雑音から「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで・・・・」という玉音放送のみを聞き取れたので、焼土作戦に備えての激励放送かと勝手に想像にふけっていた。意味を聞き取ったらしい司令は、さっと緊張して「終戦らしい・・・」とぽつりと言った。「すぐ本隊に帰る。君達は今後の指示を待て」と言い残して、早々に帰ってしまった。「終戦とは・・・」「敗戦との違いは・・・」各自空回りをしている気持ちを整理しきれぬまま各人各様に思いめぐらし、士官室の空気は白けきってしまった。

兎に角、総員集合をかけることにする。浅川大尉から情報の説明がある。皆一言も漏らさじと聞き入っている。部下は重大な時こそ上官の顔を伺うと言われる。私は、しっかりせねばと胸を張って見たものの、空しい風が心底を吹き抜けて行くのをおさえることが出来なかった。

解散となる。ざわめきが起こった。いつしか私の足は滑走路に向っていた。平和というには余りにも惨めな一時である。気のせいか、太陽までが気が抜けたように照りつけている。今迄の張り詰めた気持ちが一変に崩れ去ってゆく、昨日までのいや今迄のことが何か遠い遠い昔の出来事の様に過去のベールの中に霞んでゆくのだった。然し、自分も自分なりにやるだけのことはやったぞと自答した途端に、遂に戦争は終わったのだという感慨が体の中から込み上げて来た。やがてそれは、ほっとしたと言う気持と判って来た。エアー・ポケットから抜け出した気持ちに通ずるものがあった。人生のそれからも。

眼前に聳える由布岳が鶴見岳が今まで見失っていた人間的な感情への郷愁を呼び起こしてくれた。「帰りなんいざ」年老いた母の姿が、南国の田舎の家が、大学が、瞼に浮かんでくる。禁断の扉に振れる心の抵抗を意識しながらも「生」の芽生えが段々と大きく疼き始める。そしてそれは心の呟きとなった。「そうすると俺も生き残ったのだな」

小川氏略歴

昭和十八年十二月相ノ浦海兵団入団
三重海軍航空隊
鈴鹿海軍航空隊
築城海軍航空隊
五十年　宮崎県日南市助役（二期八年）
現在　宮崎市において行政書士

築城空の思い出

元海軍少尉
元三等空佐　福山克己

鹿児島空における基礎教程を卒え、築城空に転属したのは昭和十九年五月である。

それから約半年間は、分隊長・分隊士として同期生との切磋琢磨が有意義無意味に続いた青春の一駒であったが当時の飛行長山代少佐の「日本という誇大妄想狂の国があったとさ。と言われないようにせよ」との言葉は深く刻まれて今も忘れない。

さて、実課課程を卒えると任地の発令があり、私は築城海軍航空隊と決まった。そして虎尾空から転属してきた第三十九期飛行練習生の分隊士としての生活が始まった。分隊士としての期間は短く、第一飛行士を命ぜられた。これに付随して戦時計画主任補佐及び掩体壕係将校補佐を兼務した。

戦時計画主任補佐とは飛行長を補佐し、飛行場・隊舎解体・兵舎解体・格納庫屋根はがしなど、使用されていないような荒廃状況偽装等の計画（このための兵員は築城、椎田所在の学校、寺院等に分宿）、又安武地区に増設された洞窟への衣類、燃料等の物資分散計画や日出生台等への特攻機として分散配置された以外の基地残余機を飛行長周防少佐から「基地外に分散せよ」という飛行機分散計画があった。国道沿いの田圃の中に道板を置いたり、農家庭先に入れたりして分散された。その頃は、兵舎廃材で建てられた司令部も築城の奥深い山沿いの安武地区に疎開し、第一飛行士の飛行課事務室もその一角に独立家屋としたが、私が生まれて初めて設計した簡単な建物ながら終戦まで職住一緒でそこに移住した。

掩体壕係将校とは、海軍呉施設隊（基地は呉鎮隷下）により新田原地区に造成中の掩体壕及び誘導路の管理が任務であった。

そのために、当該地区に足を運んだが、果樹園の桃、梨など美味だった。基地空襲で被爆した対空陣地全滅や血の海と化した防空壕あるいは徴用工の泣き叫ぶ悲惨な声など見聞もした。また、誘導路の整備が近隣からの勤労奉仕隊によって行われ、その人々への始業前挨拶などを恥ずかしながらやらせてもらったものだ。終戦直前に本土決戦用に連合艦隊から滑走路の急造が下令され、モッコを担いだ奉仕隊による緊急作業も行われたが、勿論間にあわなかった。

終戦の年の春過ぎて、近代科学を誇る航空基地に馬小屋が設けられた。宮崎高農出身の同期生が馬係将校となり、馬を集めて馬車を揃えて基地の一角に馬小屋が出現した。松根油という代替燃料もてガソリンは血の一滴とされたのである。基地正門を物資等が兵隊の曳く馬車で出門した珍風景も懐かしい。

基地の空襲には笑い話がある。艦載機による銃爆撃を受け、私も五m先に機銃掃射を受けたが、わが勇敢なる対空砲火は火を吹いて応戦。その時艦載機が火を吹いて黒煙をあげた。初めて見るわたしにとっては「すわ、命中」と糠喜びも束の間、パイロットは天蓋を開け、下を見ながら機首を上昇、何のことはないロケット砲の射撃であった。連合艦隊への戦闘速報もその時初めて書いた。しかし、最も痛烈な印象は、終戦の年八月七日の八幡空襲の前日の戦爆連合による基地空襲である。第一撃は、攻撃機による海岸上空から侵入の爆撃によって開始された。

当日も飛行練習生は作業のため、炎天下の基地内にいた。そして、正門前の松林を中心に退避したが爆撃終了を待って動いたところを築城奥の山影で待機していた艦載機が超低空進入、銃爆撃により多数の練習生が痛恨の戦死となったのである。当時の飛行長松本少佐と急ぎ司令

部から基地に赴くと死傷者累々。戦場指導も間もなく総員退避の連呼、既に第二撃目の攻撃機が基地上空に弾倉を開いて進入していた。

急いで退避もままならぬ中にザーッという音、続いてズシンズシンと腹にしみ入る爆発音に思わず伏せてナムアミダブツ。それで当日の空襲は終了した。負傷者を山沿いの仮設医務室に収容するため、次々とトラックで運んだが搬送が遅々として進まないので、私は周辺民家の雨戸を徴発して搬送するように指示した。続いて翌日基地に配置されている零戦に対して艦載機による攻撃が行われ、また、八幡はB－二十九による大空襲を受けた。この両日にわたる戦死者は椎田河原において厳粛簡素に荼毘に付された。

そして八月十五日終戦。築城空は解隊し復員が開始された。

私は郷里佐賀に復員したが、帰宅後十日も過ぎた頃だったか、再び呼び出されて基地に戻り残務整理。土着したのか意外と多くの隊員が残っているのに驚いた。早速司令山路大佐から甲板士官的仕事を命ぜられて、毎日の作業割当をやることになった。要するに残置軍事物資を国有財産として国側に引き渡すための作業であった。既に軍隊は解体し兵隊も国民としての作業であるので、大変ご苦労な話であり、時には缶詰も開けて食べることを許したかったが、責任者である山路大佐としては厳しい立場にあり、私は辞めさせてもらい佐賀に帰った。これで築城基地とは縁が切れたと思った。ところが築城基地に丸々二十年後の昭和四十年八月に再び復縁することになったのである。航空自衛隊隊員として再び築城基地に赴任した私は、全く感無量であった。司令部庁舎こそ昔と違って、道路を距てて正反対の位置に建っている以外は、基地内至る所に昔日の面影を残し、その後の怪談のおまけまでついて、遥かなる二十年前の築城海軍航空隊が蘇る思いであった。

かくして築城基地は、私の青春時代と壮年時代の二期に奇しくも過ごすことになった思い出の基地である。

福山氏略歴

昭和十八年九月東京外語大在学中学徒、海軍鹿児島航空隊入隊

十九年九月築城空

二十七年九月陸上自衛隊

三十六年九月航空自衛隊

三空団、八空団、西警団情報幕僚、西警団警戒資料隊長

平成二年㈱赤松菅野建築設計　参事

筆者追記

二人の航空士官は、夫々の上司を補佐された想い出を寄せられた。

築城空は規模で言えば航空母艦に相当するのでしょうか、司令は大佐の方が務められている。日出生台飛行場建設は司令の特命で、小川氏は特攻隊員としての死生感を語っていた。又終戦に伴う空虚感には共感します。

一方福山氏の補佐する飛行長は少佐の方で飛行に関する群長であり、群の有事計画（管理する施設の荒廃状況偽装等計画、燃料等の物資分散計画、在駐飛行機分散計画）と特命の掩体壕係を計画通り実行する様子が伺えた。両飛行士官は共に学徒出身、甲板士官的に隊員・作業員を直接指示し、不測事態への対応も的確で、経験も浅いのに、期間も短いのに、思考の柔軟さは学徒の特質とも思いました。続きは終戦前後についてです。

築城基地五十年史より（其の八）

会員　水町博勝

記念誌の思い出も残り少なく総括として、航空機補給部、飛行教官、高射砲の方の綴った思い出で、そしてアルコール燃料の節約飛行です。終戦時はどれだけの航空戦力が残っていたのでしょうか。

基地開庁五十年記念に思う

元海軍軍属　中村　茂

昭和十六年十二月八日大東亜戦争が始まり、日本全国は軍一色、官民一体とな

り国運の発展と国家の堅持に全力を集中した。築城海軍航空基地が零戦の基地として、昭和十七年には九十九パーセント建設は進んでいた。その年の七月頃、呉第十一海軍航空廠大分支廠長官の椎名中佐が築城に来られ、工員の募集要請にあたり、十五名の合格者は八月二日大分航空隊補給工場に着任した。毎日機種毎の部品の勉強、部品の手入れ、九七式艦上攻撃機、九六式艦上戦闘機等の整備等の技術を学ぶうちに、八月中旬補給工場のトラックに兵器を積み宮崎県の富高航空隊に行った。門に入る直前隊門右柱に築城海軍航空隊富高分遣隊と書かれた文字。全身が一瞬緊張と感激に包まれた。築城に来る零戦は、此処にいるのかと思った。

大分で一年の勉強が過ぎて、十八年八月十日頃零戦が待つ築城基地に帰って来る。基地は完全に整備され、富高より帰来した零戦が爆音を轟かせながら国土防衛に多忙な日々だった。軍の作戦の情報は極秘で内容は全く不明であった。

十九年二月頃零戦百数十機の空団は、手を握りながら北海道美幌に転出した。その直後各地区より各機種の飛行機が集まり、特に目に残る機種は、一式陸攻と九九艦上爆撃機であった。基地は混成部隊として国土防衛にあたっていた。

昭和二十年に入り沖縄戦が激化し、特攻基地として双発爆撃機の銀河が飛来し、昼夜の別なく沖縄戦に突入した。この時期に補給工場の私達は、霞ケ浦の赤トンボと言われている二式中間練習機を椎田町湊の金富神社の境内で毎日七機組立て補給工場に持ち帰り翼をつけ、燃料、油圧、油温系統を完全に整備し、最後に爆弾を装備しパイロットに渡し沖縄戦に突入していった。三月ごろ美幌より帰ってきた零戦も含め各機種の飛行機は戦闘苦難の連日であった。

基地周辺住民は、戦況悪化に伴い万一を期し、米軍機の飛来に備え防火対策として各地区内で防火訓練に務めていた。そして沖縄がアメリカ軍に占領され本土決戦となる。八月七日Ｂ－二十九が北九州を爆撃した。日中でありながら真っ赤な炎と黒煙が工場からよく見えた。引き続き米軍グラマン機数十機が基地内にある飛行機にロケット砲を掃射し全機が消えた。基地近くの下別府区内の家がロケット砲を受け炎上しその家の祖母が死亡した。区内の農家の女性二人は、空襲を逃れんと田圃の草取りを止め、走り帰る途中即死した。男性一人は爆弾の破片で右腕が吹き飛ばされた。基地周辺の松林の中に兵員数十名が飛弾により死亡。言語に絶する地獄に落ちた悲痛な一日であった。

本土決戦も遂に空しく八月十五日終戦となり、無念の涙が続いた。米軍が門司に上陸するという噂が広がり、門司と小倉の住民多数がリヤカー、車力に荷物を満載して国道十号線に列をなし、大分方面に避難した。あの日の思い出は、遠きにありて近し半世紀五十年の時代を迎えた今日、日本が世界の優秀大国に列し平和な世界が営めることは戦争による数百万人の同胞の犠牲によるもので御恩に感謝を捧げます。思い出の一片を航空隊五十年に寄せて。

中村氏略歴

昭和十二年小倉第二旅団入隊

北支方面に派遣

十五年復員

十七年大分海軍航空隊補給部

十八年築城航空隊補給部

四十八年築城町民生委員・児童委員

築城基地の思い出

元海軍中尉　河原　覺

九州の一角にある築城基地は、変化の多大な時代、五十年という半世紀の間大きな役目を果たしてきた土地、私にとっても忘れられない誠に想い出多い地であります。

第二次大戦中この地に築城海軍航空隊が開設され、海軍陸攻の航空部隊が駐留し、重要な役割を果たした。この部隊は昭和十九年春前線へ出動した。その後茨城の筑波海軍航空隊の練習部隊が多くの航空機を空輸で移動し、多くのそれぞれの隊員も移り練習航空隊となりました。

私は、昭和十八年戦争が激化し、海軍航空搭乗士官要員の募集により、各大学、高専卒業者と同時に海軍航空隊へ入隊し、基礎教育、練習機教育、実用機教育と各所の飛行隊で教育を受け、昭和十九年七月築城海軍航空隊付兼教官を命ぜられ、当航空隊へ赴任致しました。

当航空隊では、海軍第一期予備生徒約二百六十余名と海軍予科練の十三期飛行練習生約百五十名が飛行訓練中で吾々少・中尉の教官二十数名と幾多の戦闘経験を経て来た下士官約五十数名の教員とで飛行操縦教育、離着陸から始まり特殊飛行、編隊飛行、計器飛行と厳しい訓練の毎日を過ごしました。この厳しい訓練の疲れを慰めてくれるのが、飛行場周辺の各家庭での心盡くしの食事、畳の上での蒲団に休ませてもらうことでした。

それは、行橋、築城、椎田、松江の方々で特に椎田の宮部病院の「品」という方は実に愛国の人で全国婦人会の会長もやられた方でよく「しっかりやって！」と励まされた。

戦争は熾烈を極め、昭和十九年秋には台湾沖航空戦もあり、当航空隊は基地となり、吾々は昭和二十年の元旦を祝い、その後当地で鍛えた人達は続々と移動し、多くの人が沖縄戦線に散っていきました。

野中少佐率いる一式陸攻が小型ロケット弾（桜花）を下げて飛び、目標に命中爆破する神雷部隊も途中築城に立ち寄り、三、四日滞在し南九州へ展開しました。当築城も兵舎を壊し、近辺の山の谷へ疎開し、二月には特攻隊と云って出撃して還らず自爆する部隊を志願より二十才前後の若者百二十名を選び編成し、劣性能な飛行機なので夜間か払暁に敵艦にぶちあたることを想定して黎明薄暮を期しての夜間飛行訓練をやりました。

二十年三月米軍艦載機「グラマン」「シコルスキー」が戦爆連合で襲いロケット弾で中央の滑走路（近所の婦人会、福岡県の中学生達が奉仕で石を運び造ってくれたもの）に大きな穴を開けられ、また銃撃で死亡した者一日で三十数名、負傷者も多数あり、これを椎田高女の生徒さん達が健気に看護に当たってくれました。

椎田海岸付近では、多数の死者で棺桶も間にあわず、菰に巻かれたものもありました。死体は荼毘に付され、その煙を眺めながら飛行訓練を続けた想い、現在では考えられないようなことです。

このようなことから思えば、当地も戦場であったわけですが、飛行場周辺の方々には色々慰められました。我々も何時の日か出撃していくものと「さらば、元気でいておくれ、永の別れも明日となる、恋しい基地をあとにして、夢は爆音あらく消えて行く」と歌ったりしておりました。

五月には、沖縄も陥落しいよいよ本土決戦に備え、当基地より一部は佐伯基地へ移動、亦一部は湯布院（現在の日出生台）に仮設された滑走路へ二十数機の飛行機を運び爆弾と共に隠匿し、何時でも爆装し突っ込む態勢としました。私も夜間飛行中七月二日未明下城井の奥の山の中に不時着、九死に一生を得て救出されたことがあり毎年この日を思い出します。この様な状況ながら皆士気旺盛で乱れる者もなく、それぞれ軍人の本分を全うすべく勤めておりました。そして遂に八月十五日終戦の日を迎えました。当日も夜間飛行にと、そのころ駅に出て行って、駅長より重大放送ありと知らされ駅のラジオで詔勅を聞きましたが何のことか分

からず直ちに椎田の山奥の士官宿舎へ集まり最後まで戦うか如何にすべきかと議論しました。翌十六日、総員集合があり「航空隊は解散、皆郷里へ帰れ」と復員の命があり皆バラバラに帰っていきました。私共士官はどうするか数日間右往左往しておりましたが八月二十一日隊長より兎に角一応帰って欲しい。飛行機を使ってもよろしい（二十五日までは飛行機を使ってよかった）とのことで、飛行場へ行き同僚のT中尉は東京へ、W中尉は西ノ宮へ、私は岡山へと、二度と築城へ来ることはないだろうと感傷に浸りながら飛行機乗り逃げの形で築城基地を後にしました。

その後九月初め新聞・ラジオ等で「士官は原隊に復帰せよ」との知らせがあり、私は鈍行の汽車に乗り築城基地に出頭しました。上官より周辺の山や谷の穴に隠匿していた爆弾やら諸物資の処理に当たり、残っていた飛行機にガソリンをかけて焼きました。燃える飛行機を眺めながら誠に悲痛な思いを致しました。

終戦により一時目的を失った心は、月日が経つと共に平常心を取戻し、生き残った我々何としても祖国復興せねばの気になり、築城で鍛えた精神でそれぞれの人がそれぞれの分野で努力しました。

今日経済大国になり、衣・食・住所・遊に不自由のない恵まれた国民生活を送れるありがたい生活を感謝し過ごしております。

それにしても当築城基地に関係し、若くして亡くなられた多くの殉職の英霊に対し「今や日本は立派な独立国家となり、世界人類に貢献する国になりました」と伝え、安らかに御冥福下さいと念じております。

築城基地は使命を果たす地となり、益々発展していくことを願っている次第であります。

河原氏略歴

十八年　土浦海軍航空隊入隊
十九年　北浦空、築城空
二十一年　椎田町婦人会の製塩に協力
四十一年　八洋汽船㈱設立

高射砲兵の当時を偲んで

元海軍高射砲兵
一等整備兵曹　坪井　鈴男

昭和二十年五月頃と思う。連合艦隊に籍のあるまま、呉海兵団より私を含め下士官三名が築城海軍航空隊に派遣された。機銃陣地構築のためであった。

綾部少尉と砲術学校卒業生四名、兵員三十六名と台湾帰りの甲飛十四期の予科練兵が多分四十名位で、基地と稲童出屋区（鞘土）に二十五ミリ連装機銃七基の陣地と指揮所・見張所・弾薬庫の構築を始めた。

兵の寝泊りは松原地区の松原寺と稲童地区の神事場であったが、予科練兵は航空隊で全員泊り、食事は毎食機銃陣地の兵隊が航空隊まで取りに行っていた。

予科練兵は、台湾で厳しい教育を受けたのか何事も自分達の手で自分のことを進め、手はかからなかったが、二水、一水、上水兵長と補充兵が混ざり、一寸兵隊が軍隊に慣れるまでは苦労した。

七月の上旬には陣地も出来上がり、勿論、機銃操作の訓練をしながら作業を進めた。名前は綾部隊で米軍の艦載機グラマンをターゲットとした。七月にはグラマンが二回低空で機銃掃射の攻撃を加えた。勿論陣地も機銃で応戦した。アッと云う間の出来事で、戦果は二回共不明であった。

八月初めのグラマン機銃掃射にも私達は陣地で応戦した。これで実弾を発射したのは三回目、グラマンの機銃掃射にも慣れてきたような感じであったが、応戦には隊員も一生懸命だった。

B－二十四の来襲情報で、「戦闘配置を離れろ」の指揮官の命令で、約三百メートル離れた山の中へ退避した者や近くに

ある民家の防空壕に入った者或は田の溝へ隠れた者等色々であったが、Ｂ－二十四の通過後、陣地の兵隊十四名の戦死が確認された。

勿論民間人の死傷者もたくさんあった。出屋区の民家二十戸以上焼けるのを目のあたりに見た。稲童地区には、砂押隊といって長井海岸に通じる処に機銃陣地が前後して出来ていた。また、新田原覗山付近でも整備兵がたくさん戦死した模様であった。当陣地の戦死者十四名は骨にして、松原寺に祀った。

グラマンＦ６Ｆ

八月十五日昼機銃陣地で、終戦を迎えたが、本当だろうかと疑った。その日一日は敵、味方とも飛行機は飛んでいなかった。非常に複雑な感じであった。玉音放送は聞かなかったが、降伏を知ったのは正式に翌十六日であった。

坪井氏略歴

昭和十五年　呉海兵団入団

巡洋艦「熊野」空母「瑞鶴」乗艦

十六年　真珠湾攻撃に出動

十九年　比島沖海戦にて乗艦撃沈

二十年　築城海軍航空隊機銃陣地

無水アルコールでのフライト

元海軍航空隊　少尉　野見山　芳久

油の一滴は血の一滴よりも貴重視された戦争末期にあっては、最後の決戦に備えるためにも、航空燃料の確保は正に血の一滴よりも貴重なものとなっていた。

通称「赤トンボ」の訓練を、行く先の実用航空隊が未決のため、通常訓練期間を超えて築城空での訓練を受けていた我々に対し、アルコール燃料による訓練に切替えられる事になった。

当時書き残していた「飛行作業注意摘録」の中に次の記録を見い出した。隊長の「おまえさん達は、従来の訓練生に比べて、内容・期間共に十二分過ぎる位の訓練をやり、技量を身につけてやっている。従って、このアルコール燃料でもって充分訓練が出来る。今から注意する事項を充分に肝に銘じてカカレ！」の号令で爾后の飛行作業は又「アルコール燃料」と云う新たな課題が追加されての訓練が始められた。

十九年九月二十二日

混合燃料使用に関し次の諸点に留意する。

一　試運転時特に加速に留意すべし

二　飛行後毎に燃濾（気化器系）を点検すべし

三　気化器水抜きの励行

Ｂ－２４爆撃機

四　燃料消費が増大するので飛行時常にタンク内の燃料に留意すべし

九月二十七日

アルコールである故、急にレバーを入れるとパンパン云うから、最初はレバーを極めて静かに入れよ。さすれば爆音の悪くなる事なし

九月二十八日

アルコール燃料を使用しておるので加速が悪く、パンパン云う。余りパンパン云うのは気化器の悪いこと明らかである。補充品なき故大切にやれ。

九月二十九日

特殊飛行終われば必ず飛行場上空を通過すべし。「エンジン」を一杯絞って降下するべからず。アルコール燃料であるから故これから先は冷えて来るとレバーを入れてもシリンダーが冷えて起動しなくなるから必ず一、五／十～二、〇／十入れて降下せよ。

十月二日

二分隊で再離陸時五十メートル位の高さにて、ペラ止まり海中に飛び込んだ。レバーを急激に操作したる結果とおもわれる。レバーは静かに入れよ。

アルコール燃料なる故注意せよ。

アルコール混合燃料使用に対する注意事項

一　暖気は時間をかけて充分におこなえ

二　出発時には二～三回、八〇〇回転位に加速してから

三　降下時は筒温は冷え易いから、必ずレバーは一、五／十～二、〇／十は出して　慎重に降下すべし

四　やり直しは、慌ててレバーを過激に出すな

五　発動機不調の時は、レバーを静かに全閉より出し入れしてみよ

幸いにして、アルコールとの相性が良かったのか？一度のトラブルの経験もなく十二月二十七日想い出多い隊門を後にした。

野見山氏略歴

昭和十八年　相ノ浦海兵団入団甲飛三重、築城、豊橋、美幌、松島空を経て郡山第二基地で終戦

昭和二十一年麻生産業、麻生セメント

昭和五十年系列会社代表取締役就任

筆者追記

築城海軍航空隊の任務は三期の変更をしている。一期目は零戦による艦上戦闘機操縦者の教育、二期目は筑波航空隊がそっくり移動し飛行教育を継ぐ、三期目は九三式中間練習機操縦者の教育その卒業と其の中から赤トンボ特別攻撃隊を編成し終戦を迎えた。

戦況ではマリアナ沖・レイテ沖海戦に参加し、航空特攻は比島・レイテ決戦、台湾沖航空戦、沖縄決戦、本土決戦それぞれの航空機搭乗員を育成し送った。

海軍航空の特攻戦没者は二、五四八名。比島・沖縄の海軍特攻機数は延べ九九三機になる。

本土決戦前に終戦となり、築城基地の航空機等の米軍への引渡し目録の一部には、航空は総て焼却損品で零式艦戦九八機、九三陸中練七四機、彗星・九〇式機練各三機、紫電・一式陸攻・月光・天山・白菊・二式陸練各一機です。

赤トンボに搭載する爆弾二五〇kg爆弾は五〇九弾、枯渇しそうと言われる燃料は二カ所に計一、九八五L保有していた。零戦の機内タンク四七〇L落下増設タンク三二Lℓ計七九〇L、これに九十八機数分使用すると二十五回出撃出来る量です。

無水アルコールを混合の節約もあったが、事実は零戦用高オクタン価の燃料は枯渇していた。其の九でその証言を伝えます。

築城基地から出撃した特攻機は銀河五機搭乗員十五名ですが、出撃地鹿屋、串良、国分、出水等へ内地各地から来る特攻機の中継・待機・避難基地としての役

割もありました。
終戦時の赤トンボ特攻隊は誤情報で出撃待機し、隊長は情報の誤りが判明寸前で解除した。
又敵機の銃爆撃による凄惨な記憶は誰も忘れことなく慰霊と共に語られていました。
次は最終で基地を支えた方々の思い出です。

築城基地五十年史より（其の九）

会員　水町博勝

記念誌の思い出は今回が最終です。零戦部隊の整備士官、地元医院の子息で少年時代に見た光景、地元医院の看護婦で婦人会長、負傷兵の思い出です。

築城海軍航空隊の思い出

旧海軍整備兵　海軍中尉　松田　永生

昭和十七年春、特設零戦部隊第二五二航空隊員としてラバウルを振り出しにニューギニア、ガダルカナル作戦を終えて一年四カ月振りに館山空に帰着、昭和十八年八月初め築城海軍航空隊勤務となり、陸路築城空に入隊した。第七分隊士栄エンジン整備担当を命ぜられ十九年二月まで七カ月間を過ごした。
南方戦線では敵機を目撃せぬ日はないと云った緊張の連続であったが、築城では戦時色はみなぎっているものの警報を聞くのは希であった。
その頃、栄エンジンの致命的故障が続発、この原因究明に全力を傾注して十八年末までにほぼ解決した。やれやれと肩の荷を降ろす暇もなく十九年二月に館山空に転勤、第二次二五二空編成に取り組んだ。
十九年五月硫黄島進出、サイパン作戦、マリアナ海戦で飛行隊は壊滅、整備員の私は茂原空に帰還、第三次二五二空編成、十九年台湾沖航空戦、レイテ海戦のため沖縄、台中空、クラーク基地で全力投球したものの、我に利あらずして内地に帰還、国分空、出水空で沖縄作戦、菊水作戦に参加。
二十年七月初め西日本の零戦築城空集結を命ぜられ、急遽築城に移動、対戦体制をとった。
零戦の主力は私の属する三〇二飛行隊（零戦空部隊）で本部は硯山に設営され、飛行指揮所、待機列線は飛行場の北西部松原地区神社に隣接した位置に置かれた。パイロット・整備員は指揮所横のテントに陣取った。
飛行隊に二台のトラックが配分されたので、車両は運行続きで朝夕の零戦分散・集結・隊員宿舎（椎田町西福寺）往復・零戦整備所・本部往復・食事運搬・その他雑務でドライバーを一時休息させるため私も何回か運転したことを思い出す。
今回築城に移動してまず目に入ったことは、飛行場内の建築物の木造は全部取り払われ、格納庫等のトタンは全部はぎ取られて、空から見て航空機、物件は皆無状態になっていた。唯一目に付いたのは第十二格納庫の前に竹製の実物大の模型飛行機数機が並べられていたことだった。
次に終生忘れることの出来ないそして極秘とされていたことは、零戦用燃料（オクタン価九五）保有量が八月初め頃には全機一回搭載のみとなっていた事、そのため零戦始動時にガーグルから落ちるわずかな燃料を容器に受け取って大切にしたことである。
基地周辺の方々から零戦は、何故飛ばないかと再三声をかけられた。
以上の状況にあっても、周辺住民は最後の勝利を確信して、食糧増産に励み、その合間には松根油の採取に力を入れていたのであった。

飛行場周辺の状況

一　警報発令時（二十・七・四～八・十五）

警報発令があれば、待機零戦全機発進、

地上にいるパイロット、整備員はかねてから指示されていた場所に退避、解除があれば速やかに原点に復帰した。

ただし、一部の人間は指揮所の近くの指示された場所（松原区神社の森）に居て帰還機に即応できる態勢をとっていた。

二　零戦整備場（二十・七・三～八・十五）

零戦整備（中検査以上）は、下別府地区神事場（水神森といわれていた、現在墓地となっている）に設定した。飛行場西約一キロメートル付近で、松の大木が林立していて上空からは発見されなかった。そのため、整備作業は順調に進捗した。

三　稲童、松原地区の被爆状況

飛行場北西部、音無川に二カ所橋がかけられて稲童部落、同浜部落ぎりぎりの処まで誘導路が造られ、要所々に鉄筋コンクリート製の大型機用、小型機用の掩体壕が完成し飛行機を隠蔽していた為に最大の爆撃目標となり昭和二十年八月七日の空爆で稲童出屋地区大被害を被った。

当時住宅は木造であり、ある程度密集していたため同地区の約二十戸が全焼又は倒壊し、死傷者も出て壊滅状態となった。

松田氏略歴

昭和　四年佐世保海兵団入団
八年整備術練習生（霞ヶ浦航空隊）
九年第一航空隊、大村航空隊
十年高等整備術練習生（横須賀空）
十一年大村航空隊、霞ヶ浦航空隊
十五年土浦海軍航空隊
十七年佐世保海兵団、元山海軍航空隊
第二五二海軍航空隊
十八年築城海軍航空隊
十九年第二五二航空隊三〇二飛行隊
（館山、三沢、硫黄島、茂原、国分、伊江島、小禄、台中、クラーク、鹿屋、茂原、笠原、国分、出水、築城）
二十七年米軍築城基地勤務
三十　年航空自衛隊入隊
四十七年退職

昭和二十年八月七日から九日に掛けての悪夢のような光景

上田病院医院長　上田　哲二

八月七日、当日は日本晴れの好天気であったと記憶しています。零戦隊基地であった築城海軍航空隊は、朝からＢ－二十四、Ｆ－六グラマンによる戦爆連合の大編隊によって銃爆撃を反復して受けました。衛門前の重箱池の土手裏に避難中の操縦学生が機銃掃射を浴び、戦死者の大半が操縦学生であったと後日聞きました。地元ではその後当分の間、重箱池の魚を食べることはしなかったと聞いています。

その当時基地の部隊は築城町の山手に仮設兵舎や横穴を掘って、壕として疎開していました。仮設医務室は、広末の安永地区の山沿いにあり、現在椎田バイパスの通っている場所と山裾との間に病舎があり、空襲時に避難出来ない重症患者は横穴の壕に収容されていた様でした。空襲が終わってから当日の負傷者は仮設医務室に次々とトラックで運ばれたが、搬送が遅々として進まないので周辺民家の雨戸を徴発してこれに乗せて搬送したとの事でした。

この様に多くの重症者が出た場合に基地衛生隊による処置は不可能で突然この地域の開業医に加勢の要請がありました。当時の地域医療事情を思うに、開業医の若手は殆ど出征しており、比較的高齢の医師のみがわずかに残っていました。小生の父も軍の要請で仮設医務室で負傷者の治療に当たり、又、当院にも軽傷の負傷者が相当数運ばれて来られ治療をしていました。小生も自宅より薬等自転車で衛生隊に運んだ事を記憶しています。その時に印象にあるのはスチール製の二段ベッドが並んでいる薄暗い壕で苦痛の声

が処々で叫ばれていた事です。

空襲があれば基地側もこれを迎え撃ったわけで、飛行場周辺及び基地内の機銃陣地（松原側の掩体壕近くに多い）、現在椎田中学校（当時は高台の桑畑）にあった高射砲陣地よりの銃砲撃が主でした。しかしその成果は私の知っている限りではありませんでした。

八月八日再度の来襲、当日は八幡市空襲があり、当地からも夜間にサーチライトの光に捕らえられて爆撃機の姿と火災のために空が赤くなった状況を思い出します。

八月九日戦死者三十七名の遺体は安永から越路・椎田町役場（現在の）・西高塚へと馬車で運ばれ「寺渡橋」のわずか下の城井川の河原で荼毘に付されました。

当日も雲一つない炎天下で城井川の河原は完全に干上がり、河原の小石は真っ白に変色し、河原全体に「カゲロウ」が立ち昇っていました。遺体は一人ずつ薦に巻かれていましたが、頭部から膝までは隠されるも、膝から先は露出されていて、作業中に負傷したためか、ゲートルをし、地下足袋を履いている様でした。

馬車の車輪は当時では珍しく、海軍ではタイヤで、数台の馬車が遺体を満載して小生宅前を通った光景を目撃してショックを受けました。当時は火葬するにしても主燃料の薪が不足で、学校を壊した廃材を使い、重油をかけて焼いた為に煙が立ちこもり、強烈な異臭が此の地域に充満し、数日間食事が喉を通らなかったと住民が言っていました。

荼毘に付された城井川河原

当時は日中の煙、夜間の明かりは即敵機を呼ぶ目標となる為に、点火と同時に全員が川土手の斜面に隠れて焼き終わるのを待ちました。火葬後に隊側は一体につき少量の骨を拾いましたが、残された骨で河原は白骨の山と化しました。地元西高塚の住民はこれを放置するのに忍び難く、大きい味噌甕を購入して残存骨を統べて納めて、近所の真光寺にお預かり頂き供養を致しました。

この件に関しましては、小生の父は長男が戦死したこともあり、非常に奔走していました。後年西高塚地区の墓地に埋葬し、四十二年八月十三日に西高塚婦人会一同、多武石材店のご厚情により立派な墓石が建てられました。

以上日々遠くなりつつある記憶を少しづつ呼び戻して書かせて頂きました。当航空隊の創設より現在に至る長い日々の中の或る数日の想い出が、今後の航空自衛隊と周辺住民との間の親睦、付き合い等何らかの意義を持つ事が出来ますれば、拙文を書いた小生と致しましたは幸甚であります。

上田医師略歴

昭和三十三年長崎大学医学部卒業

三十八年長崎大学院医学研究科

博士課程卒医学博士授与

三十九年上田病院（内科・小児科）

亡父より継承

空襲の状況を回顧して
戦死者の火葬及び法要の状況

椎田町婦人会副会長　竹口　久枝

西高塚婦人会と築城海軍航空隊との関係について述べておきたいと思います。昭和二十年八月初旬勝利を信じて止まなかった私共、次第に希望がなくなりかけておりました。日夜築城航空隊周辺の空襲は激しさを増し、遂に昭和二十年八月七日朝、雲一つない晴天の空に空襲警報のサイレンが響いた。米軍機の大編隊が海軍築城基地を急襲したのだ。米軍は基地施設だけでなく地上を退避する兵員にもしつこく銃撃を加えた。基地の入り口近くの重箱池に、訓練中の多くの飛行学生が飛び込んだ。銃弾で飛び散る水煙、悲鳴とうめき声が水面を埋めた。この攻撃で三十七名の若者が命を落とした。

また八月八日築城町広末で作業中の兵列を目がけて執拗な米軍機の機銃掃射、これらの空襲によるおびただしい数の負傷兵士は椎田町湊の集会所に収容されました。

今思っても、よくも卒倒しなかったものだと我ながら背筋の凍る想いです。足の踏み場もないほどの負傷兵は全員最後のうめき声を発している断末魔の如き姿、一人の重症者だけを手術室でなんていう段階ではないのです。ただ手当たり次第包帯を巻く、ガーゼで押さえる、とりあえず止血だけして、隣の兵士を見ればもうすでにこと切れていて、傷ついていない兵士が小さな板切れに次々と無言のまま、その氏名と階級を走り書きしては棚の上に並べました。棚の上の名札は見る見る増えて行ったのです。

私達も、勿論、介護に走り回っていた兵士も、ただ気のふれた者の如く無我夢中で手当てにおわれ涙さえでませんでした。

翌八月九日午前九時頃だったでしょうか、椎田町の方から上田病院の前の通りを、荷車の列が通り始めました。疲れ果てたような海軍兵士が、それでいて急ぎ足で寺渡橋の方へ進むのです。私達はその光景を唖然と見ているうちに、もしかして昨日の・・・と思ったのです。然し荷車の上には長い箱もあればいたって簡単にムシロにくるまっただけで足の先が見えている方もありました。ただ黙々と進む隊列に少し遅れて、淋しそうに歩いて行く兵士に私は思い切って尋ねました。それは、確かに私達が昨日手当の応援をした方々である事、そして、箱に納められている方は階級が上である事を教えて下さいました。そして、寺渡橋下の河原に並べられ一人一人の頭の所に少し大きめの石を並べ白墨で氏名を書かれていました。私達はその様を物陰から身震いしながら手を合わせて見守りました。私共は防空壕の中で「今日で自分たちも終わりだぞ」との院長先生の言葉に誰も無言でした。しかし、その日は無事解除になったのです。一晩中荼毘の火は燃えていたようです。

もうそこには軍人という気迫もきびきびした行動も、涙さえもありません。翌日も同じような荷車が参りましたが、昨日のご遺骨を納める木箱を一人が二箱持っている兵士もあり、その箱をお手玉のように手の上で転がしている方もありました。そして、昨日と同じ河原で同じ方法で荼毘に付されたのですが、前日の方々のご遺骨の一部しか拾われなくて、その殆どが河原に残されたのです。

あまりにも無残な情景に、その当時の婦人会長さんの呼び掛けに応え、全員の手によって綺麗に拾いあげられ、現在の町内会戦没者共同墓地の隣に無縁仏として葬られてあったそうです。特別御芳志の方々のご厚意によって現在の様な墓碑が出来上がった由に承っております。その後毎年八月十五日には墓碑に旭日旗をかけ町内戦没者の墓前と共に祭壇を飾り、賑やかな盆踊りでお慰めし、今日の平和の礎になられた方々に心から感謝する事を忘れない様、心を新たに致しております。然も戦後五十年ともなれば婦人会の

あり方にも隔世の感止むなく、そんな大戦が身近にあったことさえ知らない世代となって参りました。然し今日の平和が如何に有難いか、そして戦争が如何に無残なものかであるか、誠心誠意語り継がねばならないとつくづく感じております。

竹口副会長略歴

昭和二十年福岡県立京都高女卒
京都郡医師会立看護学校
入学
椎田町上田病院勤務
四十年椎田町宮部病院勤務
平成　元年椎田町婦人会西高塚支部長
二年椎田町婦人会椎田校区会長
四年民生委員

死神からの解放

元築城海軍航空隊

二等飛行兵曹　大西　和男（甲飛十三期）

昭和二十年（一九四五）八月七日十一時四十五分Ｂ－二十四による敵襲にて、私は重箱池堤防の下で爆弾弾片創を受け、また多くの戦友が散華した。敵襲の当時、爆創のため仮死状態のまま池まで飛ばされ泥水に浸っていた私は幸運にも、波状襲撃だったグラマンの標的にもされず、意識が戻り這い上がった処で救助された。

別府病院でも生死の境をさまよい続け、特別重症患者として小室に単身隔離され付き添い看護のおばさんを始め，医師、看護婦も、身内の如く面倒を見てくれ、又同期戦友や先輩からも励ましを受けた。お陰様でようやく死神から解放されたのか、手術後の経過もよく体力の回復も奇蹟的に早くなり十二月十八日退院した。

椎田町に立ち寄り残務整理の責任者である西田大尉を尋ね、退院報告とお礼を申し上げてお別れした。

飛行機を焼却処分中の築城空を車窓から眺めながら、あれこれと悪夢の様な往時を思いうかべながら感無量の思いで故郷へ向かった・・・。あれこれ往時の事が想い浮かんで感無量である。

今もなお生かされている私、機会ある毎に生命のある限り、想い出の地「殉国勇士之碑」に参拝し、友の冥福を祈りたいと思う。

殉国勇士之碑

築城海軍航空隊消えてからもう四十八年。でも、ぬくもりのある新生築城基地が現存する今日、寝食苦労を共に同じ目的に生命をかけた青春時代の絆を生涯大切にしたい築城空の会の人達と共に・・・

大西氏略歴

昭和十七年海軍志願美保海軍航空隊
十九年築城海軍航空隊
六十三年北中山役場退職

筆者追記

以上築城海軍航空隊時代の体験されたＯＢ会等の方の想い出を紹介いたしました。本誌「特攻」の会員の方には戦時の体験を聞く機会がなくなった現在。参考になれば幸いです。

会報第１３７号に掲載された鮒田理事の記事「終戦時宰相・鈴木貫太郎海軍大将を偲んで」より終戦間際の中枢の様子を知り理解を深めることが出来ました。

「特攻」の構想は、昭和十八年六月侍従武官の城海軍大佐が差遣武官として南東方面を視察した際、航空戦力の激減に衝撃を受け、航空本部総務部長大西滝治郎中将に「体当たり攻撃」を進言され、その他上官にも上申し、レイテ作戦に於いて大西中将の神風特別攻撃隊に繋がった。昭和十九年二月城大佐は航空母艦「千代田」艦長を拝命、そしてレイテ海戦に参戦、撃沈、「千代田」と運命を共にされた。

（其の三）で思い出を記された零戦パイ

ロット小平少尉は「千代田」から戦闘機攻撃隊として発進、母艦撃沈によりルソン島の飛行場に降りた。

継戦能力である石油は、国内では石油資源の確保は困難であり、昭和十六年に米国、英国、オランダからの戦略物資の原油等が全面禁輸となり、太平洋戦争の引き金となりました。開戦直後に英領ボルネオに上陸、油田を占領した。昭和十七年三月には原油を内地に輸送開始し、十八年までは計画以上に輸送したが、その後は連合軍の反撃によりタンカーを大量に失い原油は激減した。国内の製油所は昭和十九年から空襲があり、終戦時の太平洋側精油所十七の内十五製油所に被害があった。原油がなく製油能力も欠き危機的状況でした。

零戦整備の松田元海軍中尉が極秘にしていた零戦の高オクタン価燃料は、七月築城に百機近くを集結しても補給なく、八月上旬には一回分の燃料しか搭載できなかったこと、敵着上陸に備えた部隊は、一億総特攻も叶わず、ポツダム宣言受諾は当然の帰結でした。

（其の八）で述べた米軍への引渡し燃料資料は燃料タンクの容量であって、整備の松田海軍中尉の語る実燃料枯渇は極秘中の秘であったと思います。

歴戦を戦ってきた小平少尉の回想は、エースと呼ばれる零戦パイロットの優秀さは当初米軍を凌ぎ優位でした。

しかし米軍は戦訓をもとに戦闘機・爆撃機・レーダーの開発を進め、艦船を含め大量に増産し、各海戦で敗れて行ったのは国力の差と言わざるを得ません。

その中これしか方策のない航空特攻は、パイロットの自発的な救国の赤心をもって続けられました。

赤トンボ特攻隊員は終戦と共に任務を解かれた空虚な気持ち、そして亡き戦友の分も荒廃した日本の復興に務める気持ちが記念誌から伝わってきました。

航空基地の現場は今も変わらないことです。戦闘機等の戦力を練成保持し、それを送り出す所、又基地を支えてくれる所は基地周辺にもあります。特に戦時は、築城海軍航空隊の航空機分散のため基地外の土地に収容し、個人の庭先まで分散・隠蔽・遮蔽・欺瞞の措置が行われていました。現在に置き換えると有事立法・有事計画の平時における未整備が浮かびます。

航空自衛隊になり基地協賛会という当時十一カ市町村（行橋市・豊前市・豊津町・築城町・椎田町・犀川町・勝山町・赤村「その後苅田町に」・吉富町・新吉富町・大平村）の広域な自治体による協力会が在ります。全国基地を見ても此処だけと思います。着任して挨拶先対象の多さに驚かされました。

ジェット戦闘機の騒音等で多くの市町村が関わる住民の福利衛生等の為に意見を集約する。と共に基地行事に協力する会です。協力の一つの例は、戦争中米軍の戦爆連合による射爆撃で被災した海軍軍人及び住民並び殉職自衛官も合せた「慰霊の碑」を、基地の外（国有地でない）、民有地の被災現場に「殉国勇士之碑」を誰もが詣でる位置に建立したことです。

一方他の基地では周辺住民の民間による協力会が在ります。此処には在りませんでした。小生在任中に基地が隣接する築城・椎田町の方に他基地の例を話し、設立に同意され、部隊名第八航空団の八を採り協力会「八翔会」が設立されました。初代会長に上田病院医院長が就任され、海軍時代の協力を再び引き継がれた思いがしました。

戦争中に急に建設した基地周辺の方は、ずっと基地を見守り、地域と基地が困ったときは相互に助け合う事もこの基地五十年史は語っています。戦後七十六年経過してもこの記念誌は当時を知る貴重な記録、二十七～二十六年前、皆で収集・記録した一人として紹介いたしました。

（完）

小豆島にて『蛟龍』を偲ぶ
小豆島突撃隊と特殊潜航艇『蛟龍』

評議員　髙松　真希

一昨年の晩夏のことである。

所用があり小豆島を訪れたのだが、その時に宿に帰る道端を歩いていて偶然目にしたのが、「特殊潜航艇基地跡之塔、この庵の裏の丘」と刻まれた石碑であった。

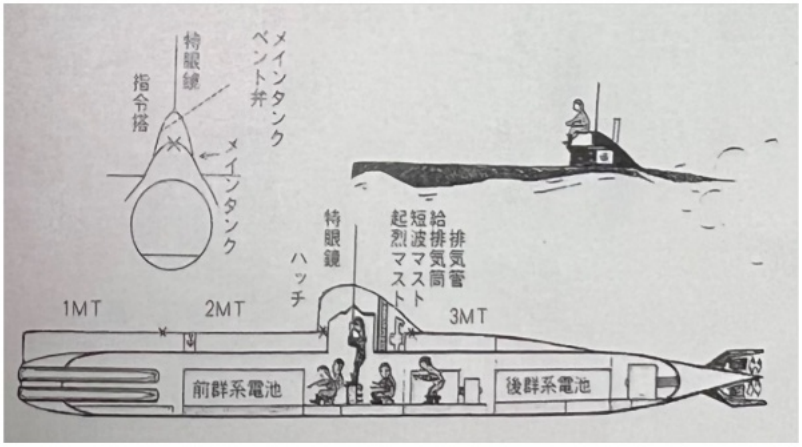
石碑に導かれ、私は湾岸沿いに佇む古江庵というお寺の裏の小さな丘の階段を上った。木々の間を抜けると目の前に海が見え、特殊潜航艇基地跡之塔はその右側に、海を望むように建立されていた。

そこに刻まれていた碑文から、戦中この場所に特殊潜航艇『蛟龍（こうりゅう）』の基地があったことを知った私は、それから数回に渡り、当時を知る地元の方にお会いし話を聞く機会にも恵まれた。ご高齢で、記憶が曖昧になっているとおっしゃりながらも、幼少或いは青年の頃に、実際に蛟龍やそこに乗り込む隊員を毎日のように見ていたという方々の話が私の心に強く刻まれたことは言うまでもない。

昭和20年のことである。特殊潜航艇『蛟龍』での特攻を行うべく集められた若者たちが、小豆島のここ古江という海沿いの町にいたのだ。彼らの隊の名前は、小豆島突撃隊（小豆島嵐部隊）といい、厳しい訓練に明け暮れ、特攻の出番を待っていたという。

その小豆島突撃隊と、特殊潜航艇『蛟龍』について、少々書き留めさせて頂きたい。

●蛟龍について



蛟龍の概略図(坂口氏の手記より)

特殊潜航艇『蛟龍』は、小型潜水艦である。蛟龍より前に使用されていた特殊潜航艇は乗員二名の『甲標的』で、真珠湾攻撃を皮切りに幾度も実戦で使用されてきたが、戦局の推移に伴い、甲標的に代わり開発・製造されたのが蛟龍であった。甲標的と比べて航続距離を倍増させることが蛟龍開発の最たる目的であった為、発電機や燃料を搭載するため艦型はひと回り大きくなり（全長約２６・３メートル、幅約２メートル）、乗員は五名となった。

蛟龍の特攻兵器としての内令は昭和20年５月28日に発布されている。船首の上下に魚雷２発を搭載しており、米艦近くへ密かに接近し魚雷攻撃するのがその任務である。敵艦に体当たりはしないものの、敵艦から数百メートルの至近距離で魚雷を発射しなければならず、魚雷を発射すると艇が浮き上がって見つかるため生還は望めなかった。

当時、蛟龍の建造隻数は約１１３隻、建造途中のものは４９６隻にのぼっていた。

●小豆島突撃隊（小豆島嵐部隊）への入隊までの流れ

他隊から小豆島突撃隊の蛟龍艇長講習員に編成されるまでの流れを、第十七期蛟龍艇長講習員達の回顧録から抜粋し紹

介する。

昭和19年８月から、武山海兵団または旅順予備学生教育部で海軍士官としての基礎教育を受けた後、水中特攻要員もしくは潜水艦艇搭乗要員として選ばれた３４０名に対し術科教育と艇長訓練が行われた。

20年３月から山口県平生町の潜水学校柳井分校にて更なる訓練を受けた後に、これから乗る兵器は特殊潜航艇の『蛟龍』または『海龍』であると告げられ、海龍艇長希望者１０５名が横須賀突撃隊に転出。蛟龍艇長希望者は広島県安芸郡倉橋町（現・呉市倉橋町）の実施部隊大浦突撃隊に赴任。

同年６月末、倉橋島から芙蓉丸（民間徴用された運送船で、後に小豆島で襲撃訓練の目標船や実習船として使用された）に乗船し約１６０名が香川県小豆島に移動し、小豆島突撃隊（小豆島嵐部隊）に着任した。

●小豆島突撃隊の配置編成について

①蛟龍の生産が追いつかず、小豆島には実戦用の十数隻があるのみだったため、蛟龍艇長講習員は次の３つに分けられ配置編成された。

・予備艇長講習員として搭乗実務訓練を受ける者、約40名。

・岡山県にある玉野造船所に派遣され、蛟龍の艤装に従事する者、約30名。

・小豆島突撃隊本部で座学、甲板士官、貨物船船長、副直将校等の勤務を分担する者、約90名。

②小豆島突撃隊（小豆島嵐部隊）は、隊員の合計が約二千人から成る組織であった。隊員の任務は多岐に渡り、その中には、次のような職務への配置もあった。

・呂号潜水艦に勤務する者。（呂号潜水艦　排水量５百トン以上千トン未満の日本海軍潜水艦）

・施設班（格納用トンネル等の建設）に従事する者。

・漁労班（不足している蛋白資源を確保する為、魚を捕ったり製塩の作業）に従事する者。

●予備艇長講習員について

約40名の予備艇長講習員は、古江に移動し丸金醤油（現・マルキン醤油）工場内にある青年学校に居住した。ここから古江湾の蛟龍繋留基地までは徒歩約10分の距離である。そして古江湾に繋留された十数隻の蛟龍を交代に使いながら、昼夜を問わず次のような訓練等を繰り返した。

①搭乗実務、潜航襲撃訓練。

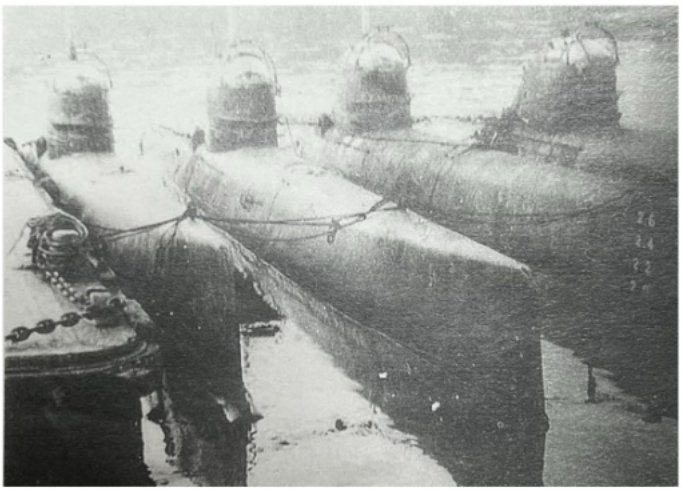
②目標鑑に乗船、操縦、見張り等。

③陸上待機、沈座（敵に見つからないよう、艦を海底に着底する事）等。

訓練を重ねるなか、実戦で蛟龍に乗る５人組に分けられ「一緒に散華する仲間」が決定された。蛟龍での乗員五人の役割分担は次の通りである。

・艇長（全般指揮）

・縦舵員（主電動機発停、縦舵操舵、射出筒操作）



繋留されている蛟龍

唯一当時のままの姿をとどめている桟橋の突端(海側)から基地跡を撮影。写真の左遠方が、蛟龍繋留跡地付近。

・横舵員（横舵操舵、通信）
・機械員（内火発電機運転）
・電機員（充電関係、冷却器注排水、移水）
※射出筒とは、魚雷発射管のことである。

●特殊潜航艇『蛟龍』の基地と繋留地について

蛟龍の基地と繋留地は、香川県小豆郡小豆島町古江の古江湾にあった。

古江海岸には蛟龍基地（司令所）と魚雷調整場が、宮川北麓には蛟龍繋留地（隠蔽壕）と火薬庫が置かれていた。

基地と繋留地については蛟龍鑑長を務めた矢野統一氏が当時の記憶を頼りに書かれた地図を添付（次頁）したので、ご覧頂きたい。

現在の古江は、昭和25年から再開された埋立竣工により湾の輪郭が変わり、水位も低くなった為、往時の面影を伺い知ることは殆どできないが、古江庵の裏手の基地跡に残る桟橋だけは、今でも唯一当時の姿をとどめている。

●蛟龍の出撃について

第一陣の出撃が昭和20年8月13日であった。小豆島基地に繋留している蛟龍で故障・修理中を除いた十隻全ての艇に実装魚雷が装填され、徳島県の小勝島に向け次々と出撃した。

その二日後に小勝島にて終戦を迎えたため、敵艦への特攻は行われなかった。

●散華された隊員について（合計17名）

・昭和20年7月22日、『芙蓉丸』が敵の集中攻撃を受け、9名が死亡した。
・同年8月2日、『蛟龍』に6名が搭乗しての潜航訓練中、敵機が投下敷設した機雷に接触し沈没。6名全員が死亡した。
・同年8月8日、屋島沖において定期船『女神丸』が艦上機の機銃掃射を受け、一般人と共に2名の隊員が死亡した。

●小豆島内にある蛟龍および小豆島突撃隊（嵐部隊）に関する碑について

島内には忠魂碑、建碑記、特殊潜航艇基地跡の塔の三基が建立されている。

『忠魂碑』

終戦からわずか3カ月後の昭和20年11月に建立された慰霊碑。戦死者17名の名前が刻まれている。古江の基地跡地に立てられたが、後に宮山山頂（基地跡地から2．7kmにある内海八幡神社内の宮山招魂社）に移動、現在に至る。

『建碑記（特殊潜航艇碑）』

昭和46年8月、坂口忠次氏が私費を投じて建立した。碑の上には蛟龍の姿をか

建記碑の上には、石で形造られた蛟龍が乗せられている。

たどった石が載せられている。忠魂碑に寄り添うように、内海八幡神社内の宮山招魂社に佇む。

『特殊潜航艇基地跡之塔』

昭和53年８月、坂口忠次氏が中心となり、文字通り特殊潜航艇の基地跡地に建立されている（古江庵の敷地内）。この碑の写真は本誌11ページ、福江理事の記事に掲載されているので、そちらをご覧頂きたい。

●坂口忠次氏について

前述の忠魂碑と建碑記の二基は、小豆島突撃隊の隊員だった坂口忠次氏が私財を投じて建立したものである。

坂口氏は大正８年（１９１９年）和歌山県に生まれ、昭和11年に海軍に入隊した。開戦当初は真珠湾攻撃に加わり、その後各方面を転戦し、20年６月に小豆島突撃隊に配属された。

終戦後は生死をかけた小豆島に残り、戦友の霊を弔うことに生涯を捧げ、自らが中心となり毎年慰霊祭を斎行した。慰霊祭のみならず、戦争を後世に伝えるためにと自分の体験を絵に描いて伝える活動も行った。

慰霊祭は、坂口氏が亡くなられた後も坂口氏の意志を引き継ぎ内海八幡神社で毎年斎行されていたが、有志の高齢化に伴い10年ほど前が最後の慰霊祭となった。

忠魂碑と建碑記がある宮山の山頂からは小豆島の青い空、青い海と共に蛟龍の基地跡が一望できる。坂口氏は生前足繁くこの宮山を訪れ、時代とともに移り変わってゆくこの景色をいつまでも見つめていたそうだ。

蛟龍基地・繋留地付近図(矢野氏の手蹟)
図の中央より右寄りに蛟龍繋留地があり、中央より下の半島のようなところが基地があった場所である。

宮山山頂から古江の方向を撮影。戦後埋め立てが進んだ。写真中央より少し上にある大きな建物(ホテル)が、資料Cに書かれている「亀屋旅館」があった場所。そこより少し右側に、基地跡が小さく写っている。（**亀屋旅館：上図の赤線**）

第四十五振武隊長藤井中尉の特攻志願に関する報道記事について

会員　大槻　健二

一　はじめに

第四十五振武隊長、藤井一中尉。彼の妻子が入水自殺の後、特攻隊に編入された「特攻志願」のエピソードは非常に有名で、各種書籍やインターネット上に掲載されている関係でご存知の方も多いのではないだろうか。この藤井隊長の妻子入水に関する報道について新たな資料を入手したためここにご報告する次第である。

二　軍による報道規制

『朝日新聞』（昭和六一・一二・一三）〈太平洋戦争中の「記事差し止め通告」綴り発見〉という見出しの記事がある。ある作家の尽力により戦時中の報道規制に関する文書綴りが発見されたという内容であるが、この史料の解説の中で**「たとえば、十九年十二月十七日「熊谷飛行学校藤井中尉の特攻志願に関する記事」の禁止通告があった。」**との記述が見られた。しかし、『水戸歩兵第第二連隊第三中隊　支那事変戦史　第二巻』の中で筆者の山田氏（水戸連隊で同僚であった方、沖縄戦当時第六航空軍司令部参謀部に勤務）は、「軍司令官が全航空軍に美談として藤井一家の殉死を通知された」という一文を残しており、筆者は矛盾を感じていたのである。

三　「振武隊美談集」

特攻に関する資料調査中、偶然先述の矛盾を解消するような記事をいくつか発見した。これは軍の発表による「振武隊美談集」という冊子について紹介する記事である。振武隊長と振武隊員に関する美談を紹介するものであり、『読売報知新聞』（二〇・八・一〇）の解説によると**「尾形侍従武官の御差遣を仰いだ折、現地航空隊の編輯になる振武隊美談と題する振武特攻隊員の美談集が献呈され、・・・九日現地軍からその美談集が発表になった」**という。この美談集を取り上げた新聞記事は地方や社によって内容にばらつきがある。筆者が現段階で確認したのは①『朝日新聞東京版』、②『読売報知』、③『毎日新聞』、④『長崎新聞』⑤『朝日新聞西部版』⑥『西日本新聞』⑦『佐賀新聞』⑧『熊本日日新聞』等であるが、①から④では第二十振武隊長・長谷川實大尉、第六十四振武隊長・渋谷健一大尉、第七十二振武隊員・金本海龍伍長の三名のみ扱っており、藤井中尉は扱われていない。藤井中尉の記載が含まれるのは⑤から⑧で、九州地方に偏っているのは記事の禁止通告と九州地方に集中した空襲被害等に関連があるのではないかと推測する。

これらの記事には文章の長短があり全て紹介したいが長文となる。ここでは代表として『熊本日日新聞』（昭二〇・八・一三）より転載し、紹介させていただく。本紙の場合、用紙の配給の関係によるものか紙面が小さくなっており、四回の連載形式をとっている。

【最愛の死の祈願　必中の魁　藤井中尉】

第〇〇振武隊長　藤井一中尉

五月二十五日我が陸軍特別攻撃隊振武隊の第九次総攻撃の結果敵側通信は次ぎのやうに報じわが猛攻に悲鳴をあげた

「ワードローブは日本特攻機の命中により一分以内に沈んだ、この二機は熾烈なる対空砲火の中に突入紅蓮の焔となりながらも墜ちないのが不思議であつた、その命中するやわが船は左にグツと傾き続いて又一機命中す、施す術も時間もなし、全く墜ちないのが不思議実に幽霊飛行機そのまゝであつた」

然しその裏面には第〇〇振武隊長藤井中尉婦人の自決による「一家特攻」の血の誓願があつたのである

「レイテ」の彼我攻防戦が熾烈を極め

たころのことである、年若き特攻隊員は続々として比島目指して勇躍、何のためらふことなく敵艦に突入世界の耳目を震駭させた、当時熊谷陸軍飛行部隊教官だった藤井中尉は一夜独り皇国必勝の方途に思ひを巡らして沈思黙考するうちこの特攻隊員の姿を見るに及び忽然として悟ることがあつた、「妻子なき若き武人の強さこそわが信念…」

翌朝厳然として悟得した境地を妻に語る中尉は最早昨日の中尉ではなく総ての私情を捨てゝ驕敵伏滅の不動の信念を抱き心は晴れた大空のやうに澄み切つてゐた、この死を決した夫の心が最愛の妻の胸に響かぬ筈はなかつた「夫と共に…」

夫人がわが夫の晴れの壮途を祝し永遠の訣別を期して自害して果てたのはそれから旬日の後のことであつた、藤井中尉は一家特攻の魁となつて逝つた夫人の霊前に深く頭をたれた、「待つてをれ俺もすぐゆくぞ」とさう告げたことであらうやがて額を上げた中尉は常と変らぬ泰然たる様子で悲壮な中にも恬淡としてわが家の門を出でたつたのであつた、目指すは隊員一同の練度向上と敵艦轟沈のみ、念願の特攻隊長となつた藤井中尉はある時は厳父となつて部下隊員の訓育に心魂を打ちこんだ、総攻撃の夜

「隊長殿、今夜は最後の晩ですから外出を許可してください」

ある部下の若鷲が願い出た

「成らぬ、明日晴れの壮挙を控へた今晩だからいかんのだ、今日まで訓練を重ね座禅を組んで修養して来たのは何のためか、最後の晩だ、準備を充分やつて早く寝ろ、明日は早い、睡眠不足のため事故でもあつたら何とお詫びするか」

編成以来嘗つて部下の願ひを聞かなかつたことのない慈父の如き隊長は涙さへ浮べて部下を叱咤したのであつた、翌朝東天の白みかけるころ部隊長最後の訓示に引続き乾杯の盃が高く捧げられた

「藤井中尉以下は沖縄周辺の敵艦船を索（もと）め轟沈致します」この世の訣別たる隊長の復命は凛として腹を裂き真赤な朝の太陽に居並ぶ荒鷲の顔は栄えに映えた、かくて第〇〇振武隊は妻の死の念願をこめて自らの血で染めぬいた鉢巻を堅くむすんだ藤井中尉機を先頭に一路基地を発進したのであつた（引用おわり）

この原稿の内容について出撃日が実際は五月二八日であるほか、敵艦「ワードローブ」は非実在の艦名である。（和訳すると「洋服箪笥」となる。）等、本文の正確性には常に疑問符が伴う。ここからは筆者の推測となるが、特攻の志願を了承しなかったために妻子が入水したとすると軍の責任と捉えられるために、第一報の記事差止通告をされたのではないか、

美談集に掲載するにあたっては当時の関係者の証言記録の真逆とも言うべき最大限の脚色が施され、特攻志願を応援するため自害し果てた軍国の妻という図式にされた（あるいはそのように報告された）のではないか、と考えている。何はともあれ、彼の特攻志願に関わる報道が行われていたことは事実であったのだ。

☆おわり☆

顕彰譜（5）

会報１３４号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第五回目です。

海軍航空

指宿特攻基地の碑
指宿海軍航空基地哀惜の碑

由来記

米軍の沖縄上陸作戦が開始されるや、天一号航空決戦下となり、九州最南端の指宿は水上機特攻基地となった。昭和20年4月29日、琴平水心隊（詫間空）39名が零式水偵、九四水偵により出撃した後、第12航空戦隊二座水偵隊（天草空）16名、琴平水偵隊（福山空）9名、第一魁隊（北浦空）23名、第二魁隊（鹿島空）8名計95名が続いて出撃していった。

本基地は本来対潜水艦作戦を目的としていたが、日本唯一の水上機特攻基地として戦史にその名を留めている。

碑は指宿基地生存有志により、旧基地跡の通信室壕上に昭和46年5月に建立され、水上機特攻隊員と基地戦没者の部隊・氏名を刻み、その冥福を祈っている。

毎年5月27日（海軍記念日）に慰霊祭を行っている。

所在地　鹿児島県指宿市田良浜指宿基地跡
建　立　昭和46年5月27日
問合せ先　指宿市十町二四二四
指宿市社会福祉協議会内
哀惜の碑顕彰会
（〇九九三－二二－五五四三）

海軍航空

宇佐特攻基地の碑
（宇佐海軍航空隊）

（忠魂碑）

海軍大臣米内光政の筆による忠魂碑は、昭和29年建立以来、市内江洲賀の久保様方にて安置、慰霊が行われてきたが、道路整備に伴い、現在の若八幡神社境内に移された。（宇佐市登録有形文化財）

所在地　大分県江須賀若八幡神社内

建　立　昭和29年5月7日

（宇佐海軍航空隊）

宇佐海軍航空隊は昭和14年10月、艦爆、艦攻の実用機操縦と偵察教育の練習部隊として開隊し、昭和19年末期までその実績を挙げていたが、昭和20年に入り、戦局は特攻戦法の採用を余儀なしとしたので、特攻編成による訓練に移行した。艦爆隊49機61名、艦攻隊32機93名、計81機154名であった。

（慰霊碑等）

宇佐市が、宇佐海軍航空隊の史跡整備として、掩体壕の保存、宇佐海軍航空隊神風特別攻撃隊の碑の建立（平成19年4月6日）、平和資料館の開館、滑走路跡の表示等を進め、戦跡の保存に努めている。

海軍航空

香取航空基地慰霊碑

由来記

香取航空基地は昭和19年2月整備教育練習部隊として香取海軍航空隊が開隊したが、空地分離編成により実戦部隊の編成、練成基地となり、最後は本土防衛作戦基地となった。

昭和20年2月米軍が硫黄島上陸作戦を開始するや、第二御盾特別攻撃隊（天山6、彗星11、爆戦6、計23機・45名）を編成し、2月21日硫黄島沖米艦船に突入して大戦果を収めた。またこの地で練成を終えた飛行隊は南九州に次々と転進し菊水作戦に散華していった。

この碑はこの地から出撃した特攻隊をはじめとする作戦戦死者、訓練殉職者さらに空襲による軍民死没者を合祀し、その冥福と平和を祈念するため、昭和51年基地関係者が慰霊碑建設期成会を結成し、基地跡が公園化されるのを機に建立したものである。

所在地　千葉県旭市干潟　旧基地跡

建　立　昭和51年11月28日

海軍航空

21 神風特別攻撃隊々長関行男慰霊之碑
神風特別攻撃隊敷島隊五軍神祀碑

昭和19年10月20日、神風特別攻撃隊の先陣として関行男大尉を指揮官とする敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊の四隊（18機）が編成され、10月21日から27日にかけて機動部隊攻撃を続行した。特に関大尉直率の敷島隊4機は10月25日に敵空母撃沈の大戦果を挙げ、後進奮闘の途を開いた。

関家は母一人、子一人の家庭であり、軍国の母は戦後不遇の中に死去され関家は断絶した。関家に縁りのある楯本神社宮司石川梅蔵氏は関中佐の偉功と特攻精神を顕彰するため、慰霊碑の建立を出身地西条に実現しようと再度にわたって努力され、遂に昭和50年3月に楯本神社境内に伊予の青石により慰霊碑を建立した。

次いで遺族の要望により五軍神祀碑建立奉賛会を昭和56年設立、全国各地有志の協力を得て、二五〇瓩爆弾形状の四軍神の碑を同所に増設し、昭和56年10月「神風特別攻撃隊敷島隊五軍神祀碑」を完成した。碑の揮毫は県知事白石春樹氏による。

所在地　愛媛県西条市大町一一三八
楯本神社境内

建　立　1、昭和50年3月21日
2、昭和56年10月25日

慰霊祭　毎年10月25日（突入の日）

代表者　神風特攻敷島隊五軍神
愛媛県特攻戦没者奉賛会

問合せ先　楯本神社
（〇八九七－五五－三六七八）

海軍航空

神風特別攻撃隊　草薙隊之碑

由来記

名古屋海軍航空隊は昭和17年4月に九九式艦爆実用機部隊として開隊したが、昭和20年2月に教育訓練を中止し特攻訓練に入った。4月6日第一草薙隊（13機26名）が第二国分基地から、4月12日第二草薙隊（2機4名）が串良基地から、4月28日第三草薙隊（14機26名）が第二国分基地から出撃して、沖縄周辺米艦船に殺到していった。合計29機56名である。

この草薙隊（熱田神宮御神体の草薙之剣より命名）の英霊鎮魂と功績顕彰のため、豊田市在住海軍出身者が豊田海友会を結成し、昭和47年4月名古屋空跡地にこの碑を建立した。

碑名は元第3航空艦隊司令長官寺岡謹平氏の揮毫による。

所在地　愛知県豊田市浄水町原山

建　立　昭和47年4月吉日

海軍航空

神風特別攻撃隊　天山隊之碑

由来記

昭和20年4月6日米軍沖縄上陸に対抗して菊水一号作戦が下令され、九州南部展開の菊水部隊（第5航空艦隊基幹）による総攻撃が決行された。

攻撃二五一・二五四・二五六各飛行隊混成による天山特攻隊（10機30名）は、米空母艦艇に殺到し多大の損害を与えている。

特攻天山隊の英霊鎮魂と偉勲顕彰のため、故嘉戸乞一飛曹の遺族が発願し、遺族会を結成して、昭和36年特攻平和観音の地世田谷山観音寺境内に天山隊之碑（海軍大将高橋三吉氏揮毫）を建立している。

所在地　東京都世田谷区下馬四－九－四
世田谷山観音寺境内

建　立　昭和36年12月吉日

建立者　天山隊遺族会

問合せ先　世田谷山観音寺
（〇三－三四一〇－八八一一）

連載山ある記17　群馬県「谷川岳」

会員　池田　康博

谷川岳は双耳峰で、丁度バットマンの頭の形に似ている。天神平から登る場合、最初のピークが「トマノ耳」、その奥、目と鼻の先にある頂きを「オキノ耳」といい、ここが最高峰で千九百七十七ｍである。

谷川岳には２度登ったが、いずれもトマノ耳までで、多分、やっとたどり着いた最初の頂きで良しとしたのだと思う。

トマノ耳も、標高は千九百六十三ｍあるものの、「谷川岳に登った」と言うには内心忸怩たるものがあった。そこで、令和３年７月27日、およそ25年ぶりに登ることにした。

山頂（オキノ耳）

谷川岳ロープウェイで標高千三百十九ｍの天神平駅まで行き、８時50分に出発、このコースは、天神峠をトラバースしながら天神尾根に取り付き、以後、肩の小屋の広場まで天神尾根を歩く一般的なコースである。９時33分には天神尾根上にある熊穴沢避難小屋を通過、コースタイムより５分以上早いペースだったが、ここからは標高差約五百ｍをひたすら登る道で、傾斜もきつく徐々に遅れ出した。登山道の所々にある露岩帯や延々と続く歩幅と合わない階段に体力を奪われる。それでも樹林帯を抜ければ、山の斜面一杯に広がる熊笹の景観を楽しみながら、肩の広場に11時７分に到着、トマノ耳には11時17分に着いた。小休止の後、オキノ耳に向かう。一旦下って、群馬県側が切れ落ちた細い登山道を再び登ってオキノ耳に着いたのが11時39分であった。

この日はガスが多くなかなかスッキリはしなかったが、それでもオキノ耳から見るトマノ耳と新潟県側の山の緑が素晴らしく、見飽きぬ景色を眺めて疲れを癒した。やがて下山の時、耳から耳までの登山道に咲く多くの高山植物を楽しみながらトマノ耳を12時24分に通過、熊穴沢避難小屋を13時42分、天神平に戻ったのが14時25分であった。

この日は、夏休みの上、４連休の最後の日曜日とあって、驚くほど多くの老若男女が登っていた。80代とおぼしき老人が家族に励まされながら登っている姿、或いは「もう歩きたくない」と親に訴えている小学生等々。

コースも様々で、下山してくる若者グループに何時に出たかと聞くと、「出発は４時です。ロープウエーの運行前です」と明るい返事が返ってきた。（田尻尾根を登ってきてこの元気さか）と驚き、オキノ耳では、まだ若い女性が「西黒尾根では人は見なかったのに、こんなに人が多いなんて」と言っているのを聞き、（ウェー、この人は日本三大急登の西黒尾根を登ってきたのか。）と驚いた。

オキノ耳からトマノ耳を望む

下山途中に休憩した天神ザンゲ岩では、休んでいた女性が頂上までの時間を聞くので１時間位ですね。と答えると、「今日はここまで、これから下ります」という。兎に角、来てみたかったという人なのだろう。

しかし、多くの人が登り、その殆どが天神尾根なので、下りは熊穴沢避難小屋過ぎから数珠つなぎとなり、超ラッシュのまま天神平にゴールとなった。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

●空晴れて　盃かわし征く君の
姿つたえし　悠久に

●かなわねど　かなえてみたしこの想い
貴方にとどけ　征くまでに
淳　子

●湯気のぼる　畑の土に　春感ず
よみびとしらず

●おお寒い　汗かく夏が　懐かしい

●春近し　嬉しさ半分　花粉症

ねこ

事務局からの連絡事項

一　令和３年度第３回理事会及び第１回臨時評議員会の実施報告

昨令和３年11月25日（木）に、第３回理事会が、12月15日（水）に、第１回臨時評議員会が、それぞれ開催され、令和４年度事業計画及び収支予算（正味財産増減予算書・案）が審議され、いずれも令和４年度計画として承認されました。

なお、令和４年度事業計画の骨子は次のとおりです。

（１）特攻顕彰会主催等慰霊祭

ア　第43回特攻隊全戦没者慰霊祭

靖國神社

令和４年３月26日（土）

イ　第71回特攻平和観音年次法要

世田谷山観音寺

令和４年９月23日（金・祝）

（２）各護國神社への「あゝ特攻勇士の像」奉納

（３）全国各地慰霊祭への参加、協賛

（４）機関誌「特攻」の発行（年５回）

（５）特攻隊戦史他の調査研究と資料の収集

収支予算（正味財産増減予算書）は次頁のとおり。

また、令和４年度の当顕彰会の理事及び評議員は、次のとおりです。

理事等	杉山　蕃	
会　長	藤田　幸生	
理事長	岩﨑　茂	
副理事長		
専務理事		
兼事務局長	石井　光政	
業務執行理事	鮒田　英一	
業務執行理事	福江　広明	
理　事	臼田　智子	
理　事	大穂　園井	
理　事	岡部　俊哉	
監　事	久納　雄二	
監　事	阿部　軍喜	
評議員	羽渕　徹也	
秋山　政隆	及川　昌彦	
太田　兼照	倉形　桃代	
長瀬　彰孝	新垣　敬輝	
早川　雅彦	深山　明敏	
原島　淳子	岩成　真一	
原　知崇	宮本　雅史	
永井　昌弘	髙松　真希	
國分　雅宏		

二　第43回特攻隊全戦没者慰霊祭の斎行について

第43回慰霊祭は、新型コロナの感染状況に鑑み、慰霊祭後の懇親会を除いて、令和４年３月26日（土）11時から靖國神社に於いて斎行予定ですので、皆様ご参集願います。

なお、今後、新型コロナの感染状況の変化に応じて、昇殿参拝の縮小等の処置をとる場合があります。

その時は、電話やメール等でお知らせしますので、必ず連絡先をご記入下さい。

なお、規模縮小時には、事前に送っていただいた玉串料はそのまま靖國神社に奉納させていただきますが、ご希望の方には返納いたしますので、その旨振り込み時に、備考欄にでもお書きいただけると幸いです。

細部については、同封の案内書をご覧ください。

三　会報記事の訂正について

会報一三七号（令和３年11月号）

46頁１段目４行目

誤　岡田芳己曹長

正　生田留夫曹長

56頁11行目

誤（令和７年１月１日～

正（令和３年７月１日～

会報一三八号（令和４年１月号）

１頁表紙

誤　令４年１月

正　令和４年１月

11頁表題

誤　死中かつあり

正　死中活あり

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
令和４年度　正味財産増減予算書

令和４年１月１日から令和４年１２月３１日まで　（単位：円）

科　　目	４年度予算	３年度予算	３年度見込	対前年予算増減	備　　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	12,303,000	12,837,000	15,300,000	△ 534,000	
② 特定資産運用益	130,000	300,000	300,000	△ 170,000	
③ 年会費	2,853,000	3,500,000	2,853,000	△ 647,000	3’参考
④ 慰霊事業益	1,800,000	2,250,000	980,000	△ 450,000	1’参考
⑤ 出版事業益	34,000	50,000	34,000	△ 16,000	3’参考
⑥ 広報事業益	0	0	0		
⑦ 受取寄付金	2,136,000	3,300,000	3,130,000	△ 1,164,000	3’実績参考
⑧ 雑収入	0	0	0	0	
経常収益計	19,256,000	22,237,000	22,597,000	△ 2,981,000	
(2) 経常費用	0	0	0		
事業負担金	780,000	780,000	345,000	0	
像制作委託費	935,000	1,840,000	935,000	△ 905,000	
発送等委託費	1,500,000	2,720,000	1,600,000	△ 1,220,000	HP制作分減
他団体助成費	2,100,000	2,100,000	1,410,000	0	
役員報酬	300,000	300,000	300,000	0	
給料手当	5,600,000	5,430,000	5,500,000	170,000	
福利厚生費	840,000	840,000	750,000	0	
旅費交通費	3,340,000	4,380,000	1,550,000	△ 1,040,000	1’参考
通信運搬費	550,000	695,000	530,000	△ 145,000	
減価償却費	50,842	32,978	93,000	17,864	
消耗品費	750,000	680,000	725,000	70,000	
印刷製本費	940,000	1,190,000	875,000	△ 250,000	
会議費	197,000	197,000	60,000	0	
光熱水料費	137,000	137,000	135,000	0	
賃借料	3,100,000	3,250,000	2,910,000	△ 150,000	
諸謝金	200,000	200,000	5,000	0	
臨時雇賃金	1,220,000	960,000	1,480,000	260,000	
退職手当引当金繰入支出	244,000	0	474,000	244,000	
経常費用計	22,783,842	25,731,978	19,677,000	△ 2,948,136	
評価損益等調整前経常増減	△ 3,527,842	△ 3,494,978	2,920,000	△ 32,864	
基本財産評価損益等	0	0	0	0	
特定資産評価損益等	0	0	0	0	
当期経常増減額	△ 3,527,842	△ 3,494,978	2,920,000	△ 32,864	
2 経常外増減の部	0	0	0		
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	0	0	
資産計上	0	0	0	0	
投資活動収益計	0	0	0	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
貯蔵品除却損	0	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 3,527,842	△ 3,494,978	2,920,000	△ 32,864	
一般正味財産期首残高	280,606,874	277,908,086	277,686,874	2,698,788	
一般正味財産期末残高	277,079,032	274,413,108	280,606,874	2,665,924	
Ⅱ 指定正味財産増減の部	0	0	0	0	
一般正味財産から振替	0	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	0	
Ⅲ 正味財産期末残高	277,079,032	274,413,108	280,606,874	2,665,924	

寄付者御芳名（敬称略）
（令和３年年10月１日～12月31日）
（単位千円）

一〇〇　御船　滋　一〇〇　呉　奈々子
七　森山　正義　七　川床　剛士
五　棟久　律子　四　鮫島美知子
三　西川　克明　二　中川　香織
二　久保浩一郎

新入会員名簿（敬称略）
（令和３年年10月１日～12月31日）

千　葉　カナル亜弓
東　京　菊池　正通
　　吉野　信昭
三　重　森　遥香
大　阪　大鳥　美緒
福　岡　御船　滋
長　崎　榎田　薫

会員訃報（敬称略）

茨　城　寺門　龍一（３・10・９）
埼　玉　髙田　槌造（３・９・９）
　　大堰　幹雄（３）
千　葉　箕輪　敏（３・12・13）
東　京　相部　一正（３・10・17）
岐　阜　豊田　寅義（３・11・19）
愛　知　小林奈美子（３・９）
大　阪　榎本　順（３・９・23）
岡　山　齊藤　成光（３・10）

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員　３０００円
・学生会員　１０００円

○　URL:https://tokkotai.or.jp
　ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒102-0072
東京都千代田区飯田橋一丁目5－7
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　jimukyoku@tokkotai.or.jp